

藍住歴史かるた

— 解説書 —



「藍住歴史かるた」刊行に思う

藍住町教育委員会 教育長 和田 哲 雄

最近の日本の子供たちの問題点の一つとして、自分を大切に思う気持ち、即ち「自尊感情」が諸外国の子供たちに比べて乏しい点が、よく指摘されます。

自尊感情がしっかり育った子は、他者に対しても優しく、何事にも粘り強く取り組むことができます。即ち、自尊感情は「生きる力」の根源となります。では、この自尊感情を育成するにはどうしたらよいのでしょうか。何か自分に自信が持てる特技を身につければよいとの意見をよく聞きますが、人との優劣を比較した相対的な自信を育成するだけでは限界があると思います。

真の意味での自尊感情を育成するには、自分・親・家族・友達・地域社会・故郷といった子供たちの自我意識を形成している構造、即ち自分自身を核とした同心円的な構造に目を向け、自分を支えている周囲との円滑で相互信頼的な関係を構築することが必要です。

端的に言えば、真の意味での自尊感情は、幼少期における親の無条件の愛の確認作業から始まって、学童期における家族や友達を大切に思う思いの育成、地域社会の人々との心のふれあい、さらには故郷へ愛着を持ち、故郷を誇りに思う体験学習といった「同心円的な周囲環境」との「双方向的な確認作業」を通じて、時間をかけて育成されていくことが必要であると思います。

このような中、「藍住歴史かるた」と「解説書」が刊行されました。この両書は、子供たちが故郷をよく知り、従来以上に藍住町を誇りに思うようになってもらうための「一つの重要なツール」になるであろうことを確信しています。大勢の方々のご協力により制作されたこの両書を活用し、故郷について大いに学びましょう。

あわぶし かつやくささ さかいしょうにん
 阿波武士の 活躍支えた 堺商人



千利休画像
 〔所蔵、写真提供は
 堺市博物館〕



三好氏が堺の拠点とした
 海船政所跡（大阪府堺市）
 〔写真提供は堺市文化財課〕

おうにん らん えいきょう けんみんせん
 応仁の乱の影響により遣明船の発着港となった堺は、中
 国との勘合貿易の利益などもあって経済都市として大いに発
 展した。三好氏は、この堺に海船政所と呼ばれる屋敷を構
 え、堺の豪商らと交渉を持った。堺商人の中には、わび茶
 を大成した千利休をはじめ、津田宗及や今井宗久など、茶道
 史に名を連ねる茶人たちがいた。そうした茶人と度々茶会を
 催すなど、深く交流した三好一族は、津田宗達・宗及の茶
 会記である『天王寺屋会記』の中にその名が多くあらわれる。
 また、堺には多くの寺院が存在するが、三好氏が関連した寺
 院も多い。日蓮宗の顕本寺は三好氏の庇護が厚かったし、
 臨済宗の南宗寺は長慶が父元長の菩提を弔うために大林宗
 套を開山に迎え建立した。日蓮宗妙国寺は、三好義賢、つ
 いでその意志を継いだ油屋常言によって建立されたが、開山
 は義賢が深く帰依した油屋一族の日珧であった。三好氏にと
 って堺は軍事・政治・経済・文化の拠点であったのである。

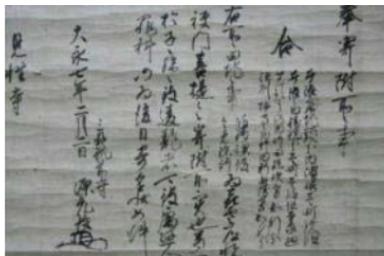
(学習のポイント)

- 1 堺は古くから多くの人が行き交い、重要な位置づけがなされていた。それをあらわすのが百舌鳥古墳群であるが、ここにある日本最大の前方後円墳について調べてみよう。
- 2 堺は自治都市として発展したが、その基盤を支えた堺商人について調べてみよう。
- 3 勝瑞にも堺商人が訪れ、茶会が催されたが、勝瑞を訪れた堺商人について調べてみよう。
- 4 妙国寺にある蘇鉄について調べてみよう。
- 5 南宗寺の庭園について調べてみよう。

[用語の解説]

- ◆ 応仁の乱：応仁元年(1467)～文明9年(1477)に足利将軍家及び管領の畠山・斯波両家の家督相続問題をきっかけとして、東軍細川勝元、西軍山名宗全が総大将となり、京都を中心に11年間も続いた大乱。
- ◆ 遣明船：室町幕府が遣明使を乗せて明国へ派遣した貿易船。
- ◆ 堺の茶人：堺が交流の拠点になるにつれて、多くの人や茶などの文化も堺に流入した。堺の豪商(会合衆)たちは、話し合いや接待の場として茶会を度々開いた。その中で、武野紹鷗(三好義賢の師)や千利休など著名な茶人も多く出現した。
- ◆ 顕本寺：法華宗本門流の寺院。細川晴元軍に攻められ、三好元長が自害した地でもある。
- ◆ 南宗寺：臨済宗大徳寺派の寺院で、三好氏の菩提寺。
- ◆ 妙国寺：日蓮宗の本山。境内に三好氏ゆかりの大蘇鉄がある。
- ◆ 三好義賢：阿波勝瑞城の主。天文22年(1553)、主君の細川持隆を自害に追い込み、実質阿波の実権を握るようになる。

井隈は わがふるさとの 名のはじめ



勝瑞で出土した平安時代の土器 「三好元長寄進状」(見性寺文書)

藍住町の奥野、笠木、住吉、徳命、勝瑞は『板野郡村誌』^{いたのぐんそんし}
 (明治14年編)によると「古時井隈郷ニ属す」とされる。井隈郷^{いのくまごう}
 は平安時代の辞書である『和名類聚抄』^{わみょうるいじゆしやう}に名がみえる莊園^{しやうえん}
 で、同書高山寺本には「為乃久末」と見え、同書名博本では
 「イノクマ」と読みを付している。室町時代には、大永7年^{むろまち}
 (1527)の「三好元長寄進状」^{きしんじやう}(見性寺文書)に「…井隈之内
 勝瑞…」という文字が見え、勝瑞が井隈荘の一部であった
 ことが分かっている。井隈荘は、源頼朝が摂津住吉大社に
 寄進した社領^{しやりやう}であったと考えられている莊園である。勝瑞で
 の発掘調査では、室町時代の生活面からさらに1m程地下に
 平安時代中頃の土器^{なかくろ}などを出土する層が確認されており、井
 隈郷の存在を裏付けている。また、井隈郷との関連はよく分
 かっていないが、藍住町役場の周辺には猪熊の地名が残って
 いる。ここから北へ約1kmの地点である矢上の正法寺付近で
 は奈良時代^{なら}の土器が出土しており、興味深い。^{きやうみぶか}

(学習のポイント)

- 1 阿波国、また板野郡はいくつの郷に分かれていたのだろうか。
- 2 奈良時代の井隈郷の農業に関する記録を調べてみよう。
- 3 律令制度の公民に対して課せられていた租税について、その特色を話し合ってみよう。
- 4 平安時代の遺物として、藍住町指定文化財「観音庵の星兜」があるが、このことについて調べてみよう。
- 5 藍住町にあった荘園について調べてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆**和名類聚抄**：日本最初の分類体の漢和辞書。古代律令制における行政区画である国・郡・郷の名称を網羅しており、この点でも基本史料となっている。
- ◆**三好元長**：阿波出身の戦国武将で、三好長慶や義賢の父。阿波守護細川氏の家臣で、強力な軍事力で細川氏を支えた。足利義維を擁して畿内に進み、堺幕府樹立に貢献し、その中心的な人物となる。
- ◆**三好元長寄進状**：三好元長が見性寺に対して井隈荘のうちの勝瑞などの土地を段銭、課役を免除して寄付することを記した書状。井隈荘に関する唯一の同時代史料で、この史料によって勝瑞が井隈荘に属していたことが分かる。
- ◆**井隈荘**：現在の藍住町勝瑞を中心とした藍住町東部から鳴門市大麻町にかけての地域に比定される中世の荘園。「和名類聚抄」記載の板野郡井隈郷の系譜を引く荘園と考えられている。

うずもれた ^{ぶんか} ^{かた} 文化を語る ^{やかたあと} 館跡



勝瑞館跡発掘調査のようす



発掘調査で検出した園池

^{むろまち} 室町時代、^{せいじ} ^{けいざい} 阿波の政治・経済・文化の中心地として栄えていた勝瑞であるが、^{てんしやう} 天正10年(1582)、土佐の長宗我部氏の^{しんこう} 侵攻によりその^{きのう} 機能が失われた。また、天正13年には四国^{せいぼつ} 征伐に功績のあった蜂須賀家政が阿波を^{ほいりやう} 拝領し、^{しろち} 城地を^{とくしま} 徳島に定めて^{じやうかまちけんせつ} 城下町建設を開始すると、勝瑞にあった寺院などは^{へんぼう} 徳島城下に移転された。そのため、勝瑞は農村へと^{へんぼう} 変貌することとなった。しかし、^{いせき} 当時を物語る遺跡は脈々と地下に息づいており、平成6年度に始まった^{はつくちやうさ} 発掘調査によってその当時の生活文化を物語る^{いこう} ^{いぶつ} 遺構や遺物が次々と^{ほりだ} 掘り出されている。なかでも、三好氏の本^{ほん} ^{きよち} 拠地跡と^{すいてい} 推定される勝瑞城^{しやうずいじやうかんあと} 館跡での発掘調査では、^{ふずい} 庭園やそれに付随した建物跡、茶の湯や香の^{こう} 道具など、当時の文化的な生活の^{こんせき} 痕跡が見つかっており、平成13年1月29日に^{しせき} 国史跡に指定された。勝瑞城館跡は、発掘調査成果を基にした^{もと} 史跡公園として^{げんざいせいび} 現在整備が進められている。

(学習のポイント)

- 1 なぜ、蜂須賀氏は勝瑞の都市機能を継承せずに徳島へ城地を移し、新たな城下町建設を行ったのだろうか。
- 2 勝瑞から徳島城下へ移転された寺院はどのくらいあるのだろうか。
- 3 発掘調査で出土したものにはどのようなものがあるのだろうか。
- 4 遺跡・遺構・遺物という言葉の意味を考えてみよう。
- 5 なぜ、遺跡は地下に埋もれてしまうのだろうか。

〔用語の解説〕

- ◆長宗我部氏：土佐の豪族で、戦国時代に戦国大名となった。元親の代に全盛を迎え、天正12年(1584)、四国統一を果たした。
- ◆拝領：拝領とは、主君や貴人から物などをもらうこと。阿波方言で、人から何かをもらったことを「はいりよ」したと言ったり、何かを頼むとき「〇〇してはいりよ」などと言うのは拝領が転じた言葉である。
- ◆勝瑞の変貌：天正10年(1582)、勝瑞城は長宗我部元親によって落城するが、勝瑞に兵力を留めていない。その3年後、阿波入部を果たした蜂須賀家政は、居城を徳島に構築すると、勝瑞城下の商人や寺院の多くは徳島城下へ移した
- ◆茶の湯：茶の湯が武将の間で好まれるのは戦国時代のこと。特に阿波三好氏が畿内進出の本拠としていた堺では、三好義賢が茶の湯を武野紹陽に学び、数寄者として知られる。その一族や有力な被官たちも茶の湯に親しみ、義賢は千利休や今井宗久ら茶人と茶会をともにしていることが当時の茶会記から読み取れる。また、義賢は勝瑞でも茶の湯を楽しみ、津田宗達は、わざわざ義賢の勝瑞茶会に参加している。勝瑞館跡の発掘調査では、それらを裏付ける遺物が多く出土している。

えんえん みず よしのがわ
延々と 水をたたえる 吉野川



吉野川の雄大な流れ



名田の渡し跡

吉野川は高知県吾川郡の瓶ヶ森を源流として四国4県に流域をもつ。幹流路延長194km、流域面積3,750km²で四国全体の20%にあたる広さを占めている。古代から暴れ川として数多くの被害をもたらすと同時に、多大な恩恵を人々に与えた。関東地方の利根川を板東太郎、北九州の筑後川を筑紫次郎、吉野川は四国三郎として親しまれている。洪水の最古の記録は、仁和2年(886)で、元禄14年(1701)からの250年間には約60回の洪水の記録がある。治水対策として築堤・筋奉行が設置された。また、今でも高い石垣があちこちで散見できる。まさに吉野川は有名な暴れ川ではあったが、洪水のもたらす肥沃な土は、自然客土として良質の藍栽培に適し、全国の藍市場を独占する勢いをもたらせている。こうして流域の特産品藍玉は、徳島藩の経済を大きく支えていた。現代においても吉野川は水運活動・上水道として、農業用水や工業用水として私たちに多くの恩恵をもたらしている。

(学習のポイント)

- 1 吉野川が香川県や愛媛県に分水されている事情について調べてみよう。
- 2 吉野川の氾濫によって毎年のように犠牲者を出したが、その供養のために立つ地藏尊について調べてみよう。
- 3 吉野川の水はどのように利用されているか、調べて地図に記入してみよう。
- 4 吉野川では、昔はどのような楽しみがあったであろうか、古者に尋ねてみよう。
- 5 吉野川の利用について、これからどんなことが考えられるか、みんなで話し合ってみよう。

[用語の解説]

- ◆利根川：群馬県最北部のみなかみ町に端を發し、関東平野を北西から南東へと流れる河川。流域面積は日本第1位を誇る。
- ◆筑後川：阿蘇山を水源として九州地方北部の筑紫平野を東から西に貫流し、有明海に注ぐ九州最大の川。
- ◆洪水記録：阿波には吉野川や那賀川など大小の河川が多く、よく洪水による流域住民の被害を出した。それらの記録として注目されるのが「阿淡年表秘録」(徳島県史料第1巻)である。
- ◆筍奉行：吉野川に連続堤がなかった時には、川の決壊を防ぐための対策として、河川敷に水防竹林の植生があった。ところが、竹林では多くの筍が育つと、それを取りに来る不心得者がいた。それを黙認しておくとして竹が育たないため、「筍奉行」を設置して竹林を管理させていた。
- ◆客土：吉野川は、毎年の洪水で流域の藍作農村に多くの被害を与えたが、そのとき上流から肥沃な土が客土となって藍畑を覆う。そのことが良質の葉藍が育つには都合が良かった。もともと一年草の藍は、同じ畑で栽培すると品質も収穫量も落ちるが、客土の堆積で畑の土壌が更新された。

へんろ お遍路を あんしん 安心させた みち 道しるべ



成長の地蔵は遍路のみちしるべ



みちしるべ春日神社の参り道

藍住町内には8か所に四国遍路の道標が存在している。なぜ遍路道から大きく外れた町内に道標が建てられているのだろうかと思議に思うが、これらの道標を調べてみると、左靈山寺(1番) 右井戸寺(17番)と刻まれたものが多い。それは、上方から徳島に来た遍路の多くが国府町の数ヶ寺から井戸寺を経て、小塚の渡しを渡って靈山寺に至るコースをとっていた。また讃岐から北方10か所を経て井戸寺をめざす逆コースをとる遍路も多かったからなのである。そのため、町内には立派な遍路道があり、多くの遍路の往来で春秋は賑わっていた。道標が各所に見受けられるのも当然で、もう少し調査すると新たに道

標を発見できるかもしれない。こうして、遍路たちが町内を通らなくなるのは徳島から靈山寺に鉄道が利用できるようになった直後からである。しかし、歩き遍路が増えた最近では、時折町内で遍路を見かけることがある。

(学習のポイント)

- 1 最初に遍路道標を建てたとされる真念について調べてみよう。
- 2 道標をたくさん建てたグループや個人について調べてみよう。
- 3 町内には地藏尊像などを利用した道標があるが、どこにあるかを調べてみよう。
- 4 今も残っている道標とあわせて、今は無くなっているが、道標が建てられていた場所を調べ、その分布図をつくろう。
- 5 道標にはどんな文字が刻まれているか書き写してみよう。

[用語の解説]

- ◆**四国遍路**：平安時代の末期には四国^{へじ}辺地^{そりよ}と言^きい、僧侶^{きぞく}や貴族^{きぞく}などのきびしい修行道場^{しゆぎやう}とされていた。澄^{ちやう}禅^{ぜん}の「**遍路日記**」によると江戸時代の初期には、ほぼ現状^{げんじやう}に近い四国霊場^{れいじやう}が整備^{せいび}されていたらしい。しかし、その大衆化^{たいしゆか}は元禄期^{げんろく}の真念の努力をまたなければならなかった。
- ◆**道標**：遍路道の道標は、真念が元禄頃から建て始め、その後^{のち}に四国遍路^{せいこう}の盛行^{せうじやう}とともに、多くの道標が建てられた。
- ◆**霊山寺**：鳴門市大^お麻^お町^あ板^い東^{とう}にある1番札所^{しや}で、釈迦如来^{しや}を本尊^{ほんぞん}仏とする真言宗寺院^{しんごんしゆう}。撫養^{むや}に上陸する上方からの遍路は、この寺を札始めとして旅を続けた。その門前町には遍路宿・支度屋・仏具屋などが集中してたいへん賑わっていた。
- ◆**井戸寺**：徳島市国府町井戸にある17番札所^{けんざい}。現在の寺門は10代藩主蜂須賀重喜の別邸^{べつてい}、大谷屋敷の門を移築^いしたという伝承がある。また、この地に来た空海が水不足で困っている村人のため錫杖^{しやくじやう}で一夜にして井戸を掘ったのが地名・寺名の由来とする伝説がある。
- ◆**小塚の渡し**：徳島城下から遍路を始めた多くの人は、17番札所の井戸寺を札始めに付近の札所^{しゆんばい}を巡^{めぐ}拝^{ばい}した後、1番の霊山寺に向かうというコースで巡^{めぐ}拝^{ばい}していた。この二つの寺の間には吉野川が流れていた^{よしの}ので、小塚の渡しが利用されていた。

県指定天然記念物
「矢上の大クス」

矢上の春日神社

藍住町矢上字春日にある春日神社には、樹齡1200～1400年と推定される県内で最も古いクスノキの巨樹がある。このクスが幹周りは11.5m、高さ約15mを測る。文化8年(1811)出版の『阿波名所図会』には「矢上の大樟」として紹介されており、阿波を代表する名木として県下一円に知れ渡っていた。クスのある春日神社は、建仁3年(1203)に奈良春日大社へ寄進して成立した莊園・矢上莊の鎮守として設けられたといわれる。矢上莊は、矢上と北方の乙瀬、鳴門市大麻町 檜 一帯と考えられている。ここは、もとは別納知行の矢上保で、藤原隆房が阿波国の知行国主であるとき、藤原季保にあてがわれた莊園である。その後、季保は奈良春日社に寄進して立荘することを申請、許可され春日大社領矢上莊が成立した。推定される樹齡によると、春日神社の成立よりもさらにこのクスノキの方が古いということになる。「矢上の大クス」は、この辺りの歴史を良く知る木なのである。

(学習のポイント)

- 1 「矢上の大クス」の大きさを測ってみよう。
- 2 クスノキは藍住町の木であるが、町内には「矢上の大クス」の他に大きなクスノキはどこにあるだろうか。
- 3 『日本書紀』に記載される「春日部の屯倉」について調べてみよう。
- 4 当時、郡・郷・保・庄といった行政単位があったが、それらの違いは何だったのだろうか。
- 5 今の行政区分に残る荘園を探してみよう。

【用語の解説】

- ◆**荘園**：奈良時代の743年に^{こんでんえいねん しざいほう}墾田永年私財法によって^{しゆうち}私有地を広げようとして^{けんもんせいけ ごうぞく}権門勢家や^{くぶん でんとうぼう}豪族は、^{さか}口分田から^{かくだい}逃亡した^{こうちこうみんせい}公民たちの労働力を利用して^{はいけい}盛んに^{りつりようせい}私有地の^{もと}拡大に^{こうちこうみんせい}努めるようになった。それが^{おとろ}荘園発生の^{おとろ}背景で、そのため^{おとろ}律令制に基づく^{おとろ}公地公民制は急速に衰えていった。
- ◆**知行国**：^{きぞく}貴族や^{ぶけ}寺社、^{こくむ}武家が^{しっこうけん}国務の^{かくとく}執行権(知行権)を獲得した国を^{しんこく}知行国、^{しんこく}知行権を獲得した^{すいせんけん}貴族や^{しゆうとく}寺社、^{しゆうとく}武家を^{しんこく}知行国主という。知行国主は^{しんこく}知行国の^{しんこく}国司^{しんこく}推薦権や^{しんこく}官物^{しんこく}取得権を保有した。
- ◆**寄進**：^{こうぞく}地方^{こうぞく}豪族などは、自分で^{こんでん}開発した^{こんでん}墾田の^{しんこく}立券のため^{くげ}有力な^{しんこく}公家や^{しんこく}大寺社に^{しんこく}墾田を^{しんこく}寄進した。立券^{しんこく}荘号の^{しんこく}手続きが^{しんこく}終わると、その^{しんこく}荘園^{しんこく}領主を^{しんこく}領家とし、^{しんこく}寄進した^{しんこく}豪族はその^{しんこく}荘官として^{しんこく}実質的な^{しんこく}経営に^{しんこく}当たった。また、^{しんこく}下級の^{しんこく}公家や^{しんこく}寺社は^{しんこく}荘園をより^{しんこく}有力な^{しんこく}公家・^{しんこく}大寺社に^{しんこく}再寄進した。これを^{しんこく}寄進地系^{しんこく}荘園という。
- ◆**立券荘号**：^{けんもんせいけ}権門勢家の^{しゆうち}私有地は、^{だじょうかん}太政官か^{みんぶしやう}民部省に^{しんせい}申請して、^{はんい}その^{しんこく}範囲が^{しんこく}決定すると^{しんこく}荘園として^{しんこく}成立し、^{しんこく}不輸・^{しんこく}不入の^{しんこく}特権が認められて^{しんこく}官省^{しんこく}符^{しんこく}荘となったが、その^{しんこく}手続きのことを^{しんこく}立券^{しんこく}荘号といった。こうした^{しんこく}立券の^{しんこく}手続きは^{しんこく}地方^{しんこく}豪族などには^{しんこく}認められていなかった。

きたかた お あ こ ぼ し あ わ おんな
北方は 起き上がり小法師の 阿波女



藍作農家の労働は過酷なものだ
つたらしい
〔紙人形の作者は河野操氏〕



下女中部屋
〔ヒロシキ・天井裏の小部屋〕

「阿波の北方起き上がり小法師ね寝たと思たら早や起きた」
これは藍あいこなし唄うたの一節であるが、寝る間もないほど働きづ
くめた阿波女たちのはげしい季節じゆうけいの情景を歌ったものであ
る。藍こなし・薬すくもの寝せ込みこが行われた頃、藍作農家では
過酷かこくな労働たにも耐えられるようにと食事は一日6回とった。
その準備じゆんびだけでも大変であるが、そのうえ藍こなしの作業
にも従事じゆうじ、さらに作業場の掃除そうじや整頓せいとん、洗濯せんたくから片付けかたづまで
すべて女性じよせいに課せられていたので、ほんとうに寝る時間は限
られていたのである。そのため北方ひやうぼんの女性はよく働くと評判
で、「嫁よめをもらうなら北方ひやうぼんの女性かたづ(阿波女)」といわれるほど
信頼しんらいが寄せられていた。それに対して男性だんせいは藍の作業に従事
するのは讃岐さぬきからの出稼でかせぎ者が多かった。出稼でかせぎ者は働かざ
るを得ない状況じようきように置かれていたためよく働いた。そこで讃
岐男はよく働くと評判され、讃岐男と阿波女がきびしい藍の
労働を通じて結ばれるケースが多かったといわれている。

(学習のポイント)

- 1 藍の加工で忙しい季節、女性たちの労働がなぜ長時間に及んだか、またどんな仕事をこなしたかについて調べてみよう。
- 2 藍屋敷にある「ヒロシキ」とは何かについて調べてみよう。
- 3 多忙な季節の6度の食事には、どんなものをそれぞれ作っていたのだろうか。
- 4 出稼ぎの女性たちは、どんな所から働きに来ていたのだろうか、古老から聞き取ってみよう。
- 5 「阿波女」が高く評価されていた理由をまとめてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆阿波の北方：徳島城下町を境として、吉野川流域の藍作地帯を阿波北方、南の米作を主とする平野部を阿波南方と呼んだ。北方でも岩津から上流の地域を上郡、下流域を下郡といて、いずれも経済活動や文化の展開に特色があった。
- ◆藍こなし：刈り取った藍を細かく刻み、庭にまき広げて天日にあて、唐竿で叩き、竹ぼうきではきかえし、乾燥させ、葉と茎の部分に分別する。この作業は、炎天下の重労働であった。また、藍こなしは大がかりな作業であり、人数も要したため、その頃になると県南や讃岐方面からヒヨウサン(日雇さん)と呼ばれる出稼ぎ者を雇い入れていた。
- ◆寝せ込み：藍こなしを終えると、秋小口から寝床に葉藍を山積みし、打ち水をしてムシロを掛けて発酵させる。その山を切り返しという作業で何度も移動させ、さらに水分の少ない所に打ち水をして、葉藍をまんべんなく発酵させる。この作業を繰り返すうち、年末にもなると発酵温度は摂氏70度程から平温に下がり、葉が出来るのである。

くつきりと ^{むかし} ^{しる} 昔を記す ^{むねつけちよう} 棟付帳



古文書で昔の暮らし偲ばれる



奥村家今に残れる文書類

棟付帳は正しくは「^{むねつけにんすうおんあらためちよう}〇〇郡〇〇村棟付人数御改帳」と書か
かれている。^{はちすかいえまさ}蜂須賀家政が阿波入部を果たすと、早くも^{てんしやうき}天正期
から棟付改めを実施した。その記録である棟付帳は県内各地
に一部分を残しているが、^{はんない}藩内^{とういつてき}全村で統一的に実施されたの
は^{めいれき}明暦・^{まんじ}万治期以後のことである。^{ぼくはんせい}幕藩制の下で農民に賦課
された^{そぜい}租税の大半は^{ねんぐ}年貢であったが、それとともに^{せんじん}戦陣の物
^{しうばん}資運搬や藩が行う^{かんのうぶしん}土木工事(勸農普請)などに^{ぶやく}動員される夫役
も負担した。棟付改めは、それらの負担のできる人数を常に^{ふたん}把握
^{しやうあく}しておく必要のために実施されたので、その^{ちやうさ}調査の対
象となるのは男子だけで、半世紀ごとに実施した。こうして
棟付改めは^{かんぶん}寛文・^{えんぼう}延宝・^{しやうとく}正徳・^{きやうほう}享保・^{めいわ}明和・^{あんえい}安永・^{ぶんか}文化・
^{ぶんせい}文政とつづく。この棟付帳を調べると村の^{こうせい}社会構成や人の移
^{どう}動、生活の様子など重要な変動を知ることができる。なお文
化・^{じよせい}文政期から女性も登録された^{こせきぼ}戸籍簿としての^{せいかく}性格を帯び
てくることが注目される。

(学習のポイント)

- 1 徳島県立文書館などで、現物の棟付改帳に目を通してみよう。
- 2 夫役とは何かについて辞典などで調べてみよう。
- 3 棟付帳の中には、百姓の家族に杓家と小家の記載がある。杓家と小家の違いは何かについて考えてみよう。
- 4 棟付帳をよく見ると、様々な肩書きが記されている。そこから、村の中にはどんな階層の人たちが住んでいたか、よく考えてみよう。
- 5 村外から転入した人たちは、それぞれどのような理由で移ってきたかについて考えてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆ **棟付帳**：徳島藩では農民に夫役を賦課する必要から、すでに天正ころの頃から各村の男子を登録しておき、夫役動員できる台帳を作成していた。特に明暦期以降には、ほぼ50年に一度の割合で棟付改めを実施し、その結果を記録する棟付帳を用意していた。
- ◆ **年貢**：蜂須賀氏は、天正17年(1589)から慶長期にかけて太閤検地けいちよう たいこうけんちを実施し、兵農分離へいのうぶんり あわと併せて一地一作人の原則に基づき、一筆ごとの田畑の等級と反高を計算し、年貢を負担する百姓ひやくしやう な うけ(名請人)を決めて検地帳けんちちやうに登録し、年貢収納しゆうのうの台帳とした。
- ◆ **勸農普請**：領主によって行う新田開発、用水路や農道の工事、川ざらえなどの作業を勸農普請と呼び、その労働力は百姓の夫役を動員して行われた。
- ◆ **夫役**：年貢とともに百姓(男子)に課せられた労働地代が夫役で、藩政初期に戦場に動員され、輸送ゆそうや土木工事に従事じゆうじ じん(陣夫役)し、また新田開発や用水路、道路工事や川ざらえに従事したが、元げん安永なえん ぶ以後は代銀納制(一人銀2歩)に改められた。

けいおう とら きず
慶応の 寅の大水 疵のあと



溺死者を弔う乙瀬の高地蔵



板東谷川と旧吉野川の合流地点

けいおう あわ だいひ
慶応2年(1866)に阿波各地に大被
害をもたらした大洪水を「寅の大水」といって、吉野川流域で
は多数の溺死者が出た。板東谷川が旧吉野川に合流する乙瀬の
東端の現堤防の上に、どう見ても泣き出しそうな大きい地藏
さんが建てられている。その台石には大氾濫による溺死者を弔
うために付近の住人から浄財を集めて建てたものであることが
刻み込まれている。日頃は水量の乏しい板東谷川であるが、大
雨により巨大な土砂が旧吉野川に押し流された。そのため、と
くにその右岸一帯は予測できないほどの被害に見舞われたので
あった。そのほかにも町内の至る所に地藏尊像が建てられてい
るが、その由来を近くに住む古老に尋ねてみると、その大半は
洪水による犠牲者を供養するために建てられたことが語られ
る。今では「なぜこんな所に洪水が」と不思議に思う場所にも
そんな地藏さんが立ち、今も香火が絶えないものが多く、吉野
川の怖さの一面を良く伝えてくれている。

(学習のポイント)

- 1 吉野川流域の農村は、なぜ毎年のように水害に苦しめられていたのだろうか。
- 2 あなたの住むところの近くに立つ地蔵さんについて調べ、その結果をまとめてみよう。
- 3 地蔵尊とは人々にどんな願いを叶えてくれる仏さんであると信じられてきたのだろうか。
- 4 町内の洪水がよく発生した箇所について調べ、今はどうなっているかに関して古老から話を聞いてみよう。
- 5 洪水の常襲地は良い藍が育ったといわれる理由について調べてみよう。

[用語の解説]

- ◆**寅の大水**：慶応2年(1866)の吉野川の大洪水は、流域の村々に多大な被害を与え、多くの人名を奪い、家屋や家畜が流出した。旧吉野川沿いの乙瀬でも溺死者を出したが、村人たちはその供養と以後の安全を祈念して堤防上に地蔵尊を祀っている。
- ◆**地蔵尊**：地蔵菩薩のこと。一般にお地蔵さんと親しまれている。古くは末法思想の流行で仏の加護から見放された衆生を救うため、地蔵信仰が鎌倉時代以後に大流行するようになった。町内各地にある地蔵尊は、乙瀬村と同じように洪水の常襲地に造立されたものが多い。また、最近の新しい地蔵尊は交通事故多発地が多く、時代の変化を感じる。

こくふ 国府への 道^{みち}をいそいだ 国司^{こくし}たち



郡頭駅があったとされる
板野町大寺字郡頭にかかる橋



国府の近辺に建てられた
阿波国分寺

あわ 阿波の国府は徳島市国府町^{こく}中^うにあった。徳島市教育委員会などによってその発掘調査^{はつくつちようさ}が実施^{じつし}されており、様々な成果が得られている。国府の中心である国衙^{こくが}には、国司^{せいわ}が政務を執る国庁^となどの重要施設^{こくちよう}があった。国司^{しせつ}とは、古代から中世の日本で、地方行政単位^{ぎようせい}である国の行政官^{ぎようせいかん}として中央から派遣^{はけん}された官吏^{かんり}である。都から阿波へ入る道としては南海道^{きいのくにかだ}があった。紀伊国加太^{あわじ}から淡路国^{ゆら}の由良^{すもとし}駅^{わた}（洲本市）に渡り大野^{やぎ}駅^{ふくら}・養宜^への国府^{むや}・福良^{むや}駅^{むや}を経て鳴門^{せいび}牟夜^{えんぎしき}（撫養）に入る。これが阿波へ入る官道として整備^{せいび}されていったのである。古代南海道の阿波国の駅としては「延喜式^{えんぎしき}」に「石隈^{いわくま}」・「郡頭^{こぞ}」の二つがあげられている。牟夜^つの津から石隈^{えんぎしき}駅と郡頭^{こぞ}駅を経て阿讃^{あさん}山脈^こを越えて讃岐^{さぬき}国府^こへ向かうのが南海道の本線である。阿波国府へは郡頭^{よしの}駅からほぼ真南^のに向けて吉野川^{よしのがわか}下^り流域^{りゆういき}の低湿地^{ていしつち}を横切^{れんらくどう}って連絡道^のが延び^{すいてい}ていたことが推定^{すいてい}されている。

(学習のポイント)

- 1 律令制について調べてみよう。
- 2 阿波国に設置された二つの駅家、「石隈駅」と「郡頭駅」について調べてみよう。
- 3 北海道はどこを通っていたのだろうか。地形図などから考えてみよう。
- 4 国府町の観音寺遺跡からは多くの木簡が出土しているが、どのようなものがあるか調べてみよう。
- 5 律令時代に藍住町にはどのような荘園があったのだろうか、調べてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆国府：国の中心地に国衙などの重要施設を集めた都市域。^{としいき}
- ◆国衙：国府の中心となる役所群。^{ぐん}
- ◆国庁：国司が儀式や政治を行う施設。^{ぎしき せいじ}
- ◆国司：国の行政官として中央から派遣された役人。
- ◆北海道：紀伊半島、淡路島、四国などが所属する古代の行政区分^{あわ じしま しよぞく ぎようせいく}で、この地域^{ちいき}と国府と都を結ぶ官道も北海道^{げんざい}と行った。現在でもその多くが小さな生活道路の一つとして埋もれている。
- ◆延喜式：平安時代中期^{へんさん りつりよう しこうさいそく}に編纂された律令の施行細則。平安初期の禁中^{きんちゆう}の年中儀式や制度^{せいど}を漢文で記す。
- ◆石隈駅：北海道の四国の上陸駅^{しよざいち}については明らかではなく、鳴門市木津や鳴門市大麻町大谷字石園に比定する説、石隈^{いのくま あやま}を井隈の誤りとし、藍住町周辺に比定する説がある。
- ◆郡頭駅：板野町大寺字郡頭付近に比定されている。石隈駅から吉野川^ぞ沿いに西に延びる北海道は、ここで讃岐への道と阿波国府^{ぶんき}への道に分岐する。

さ きそ きそ まち あか その
咲き競う 町は明るい バラの園



町民の憩うバラ園県下一



バラの花咲いて五月の空を染め

矢上の正法寺川左岸の藍翠園前にバラ園が開園したのは昭和54年(1979)のことである。毎年5月と10月の二回バラまつりを開催し、今ではすっかり定着している。1,650㎡の園内には大輪、中輪、つるバラ、ミニバラなど多種多様のバラ270種、約1,000株が咲き誇り、あたり一面に芳潤な香りを漂わせている。今では町外にもバラまつりが知れ渡り、春秋のまつりには多くの観光客も訪れて賑わっている。バラは、世界中の人々に「花の女王」として愛されており、文芸や演劇などにもバラにちなむ作品も少なくない。バラ文化とあって良いであろう。日本はバラの自生地として世界的に有名で、日本人にゆかりのある植物である。古くは「うまら」「うばら」と呼ばれ、万葉集にもその名が見られ、茨城県の県名の由来ともなっている。バラは品種改良が盛んに行われており、今ではその種類は二万品種を超えともいわれる。かつては高嶺の花であったバラも今では一般に普及している。

(学習のポイント)

- 1 バラの種類として主なものを挙げ、それぞれの花の特色を調べてみよう。
- 2 バラ園の運営やバラの栽培にどれほど苦心をしているか、関係者に尋ねてみよう。
- 3 バラまつりが盛んになるまでの関係者の努力について尋ねてみよう。
- 4 バラの魅力はどこにあるか、育てている人たちに尋ねてみよう。
- 5 バラを主題とする文芸作品や演芸活動にどんなものがあるか調べ、バラ文化について話し合おう。

[参 考]

- ◆**バラ園のイベント**：毎年5月と10月のバラまつりでは、バラ苗なえの販売はんばいや俳句大会はいく、写生大会たさいなどの多彩なイベントが行われている。
- ◆**植栽されている特別なバラ**：皇后様こうごうのお好きな「ブルームーン」やイギリスから皇后様に贈おくられた「プリンセス・ミチコ」などの特別なバラも植栽されている。
- ◆**バラにちなむ文芸作品**：バラにちなむ作品としては、歌劇かげき「ベルサイユのバラ」や小説「星の王子様」などが有名でその他にも多くの文芸作品に取り上げられている。
- ◆**バラの手入れ**：美しいバラさを咲かせるために、多くの関係者が毎年2月と8月に剪定せんていをする他、病害虫ほかの防除ぼうじょや施肥せひ、灌水かんすい、除草じょそうなど、年中休む暇ひまなく手入れをしている。

じつきゆう ちゃ ゆ し ぶんかじん
実休は 茶の湯で知られた 文化人



勝瑞の発掘調査で出土した茶碗

三好実休画像

〔所蔵は妙国寺、写真提供は堺市博物館〕

三好氏は、管領家や阿波守護家を軍事面で支えるなど、強力な軍事力を持っていただけでなく、当時の武将の教養であった連歌や茶の湯などの文芸の世界でも有名であった。三好長慶や弟の安宅冬康が当代一流の連歌師と交流を深め、度々大規模な連歌の会を催していたことや、三好義賢が当時まだ確立期の段階であった茶の湯の熱心な愛好者であったことは良く知られている。勝瑞の主であった三好義賢(実休)は、「実休ハ武士ニテ数寄者也」(『山上宗二記』)といわれた茶人武将で、当時「名物」と呼ばれた茶道具を多数所持していたそうである。『宗達茶湯日記』には、弘治2年(1556)11月28日に津田宗達が勝瑞の義賢を訪れ、「茶屋ニ而暮候まで」実休の物語を聞いたという記録が残っている。また実休は、12月2日にも宗達一人を招いて茶会を開いた記録も残っている。勝瑞城館跡における発掘調査では茶道具も多数出土しており、義賢のこうした活躍を裏付けている。

(学習のポイント)

- 1 茶は、いつごろ、誰によって日本にもたらされたか調べてみよう。
- 2 我が国に伝えられた茶は仏教と関係があるとされるが、どのように茶が用いられたのだろうか。
- 3 勝瑞城館跡から出土した茶の湯関係の遺物としてはどのようなものがあるだろうか。
- 4 千利休と阿波三好の関係を調べて報告しよう。
- 5 勝瑞城館跡で整備された会所跡で庭園を眺めながら、当時の茶会の様子を想像してみよう。

〔用語の解説〕

- ◆三好長慶(1522～1564)：三好元長の長男。現在の徳島県三好市で生まれる。管領細川氏の家臣として畿内に一大勢力を築き上げ、細川政権を崩壊させ将軍を京から追放するなど、一時は幕政の実権を掌握した。晩年は心身に異常をきたすようになり、永禄7年(1564)、弟安宅冬康を誅殺した直後、河内の飯盛城下の屋敷で病死した。
- ◆安宅冬康(1528～1564)：三好元長の三男。淡路の水軍である安宅氏の養子となってその家督を継承した。兄長慶に従って転戦し、よく補佐したが謀反を疑われて永禄7年(1564)に長慶に自害させられた。
- ◆「山上宗二記」：千利休の高弟である山上宗二が天正16年(1588)に書き記した茶の湯の秘伝書。

すいうん ようしよ し はま
水運の 要所で知られた ヤマモクの浜



阿波の富ヤマモクの浜舟出して



川舟の安全祈る不動尊

よしのがわ せいこう
吉野川は古くから人や物流の水運の盛行をみている。藍住
町では富吉のヤマモクの浜、乙瀬の浜、勝瑞の川湊が知ら
れる。古老の話によると、ヤマモクの浜では岩津(阿波市)か
ら木材が荷揚げされていたらしい。また小舟で北灘(鳴門市)
まで西瓜を運んだ方もいる。さらに平田舟でバラスや、対岸
の川端で焼いていた大谷焼の甕を大阪に、酒や縄を徳島市の
中洲港に積み出していたということである。昭和10年頃から
は蒸気船が登場し、大谷焼などは8時間かけて大阪まで運び、
バラスなどは毎日のように積み出していたそうである。しか
しトラック輸送が盛んになるにつれ、浜は昔の賑わいを失っ
ていった。浜の手前には不動堂があって、水上安全を祈願し
ていた。この不動堂は明治41年正月の建立となっていて、今
も7月に祭礼が続いている。旧吉野川の水は軟水で、浜の上
流では炊事用、下流では洗濯用として生活に密着していた。
浜の遺構は現存していて、昔日の面影を良く残している。

(学習のポイント)

- 1 ヤマクの浜に行って、川湊としての遺構を確認しよう。
- 2 江戸時代には、どんな種類の運搬船が使われていたか調べてみよう。
- 3 この浜から酒造用の水が汲み上げられていたというが、どんな方法で送水していたものか古者に聞いてみよう。
- 4 旧吉野川の水は軟水であるが、軟水は下流でどんな利用をされてきたかについて調べてみよう。
- 5 この浜は、魚釣りでも賑わっていたといわれるが、どんな魚が釣れていたかについて、古者に聞いてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆**物流**：商品流通のこと。元禄期げんろくごろから農村工業あい（藍もその一つ）が発達すると、各地に名産品が生まれ、三都をはじめ全国的な流通が盛んに行われたが、藩内はんの流通網りゆうつうもうも整備せいびされてきた。
- ◆**岩津**：古来から吉野川しゅうんの舟運しゅうんにおいて要地えどで、江戸時代には御分一所ぶいちしょが置かれ、通行船ちようしゅうから関料を徴収した。
- ◆**平田舟**：吉野川中上流あさせの浅瀬あさせでも舟を航行させるために舟底ふなぞこを平たくした独特どくとくの構造こうぞうを持った輸送船しゅうそうせん。外洋に出るときは大型船に積荷を積み替えた。
- ◆**大谷焼**：大谷焼は、甕などの大型製品を特色としていた。特に、かみがたかみがたなどに送られ、薬品などの貯蔵用ちようざうように適てきしていた。

せみ こえ き どよう あい
 蝉の声 聞きつつ土用の 藍こなし



奥村家庭に残りし藍こなし



藍こなしの風景
 [紙人形の作者は河野操氏]

春分のころまでに地^じ_づえし、その後^{のち}に苗^{なえ}代^{しろ}に播^は種^{しゆ}する。苗^{なえ}が育^なつと共^にに除^{じよ}草^{そう}・間^ま引^ひき・施^せ肥^ひ・除^{じよ}虫^{ちゆう}ときびしい作^{さく}業^ぎが續^つく。や^やつと気^き温^んが上^あがるころ苗^{なえ}は本^{ほん}畑^{はたけ}に移^い植^{しょく}して育^なてるが、そう^{さう}なると虫^{むし}取^とり・麦^あ刈^りり・水^{みづ}取^とりの重^{おも}労働^{らうどん}の日^ひが續^つく。また夏^かの刈^とり取^りりまで数^{すう}回^{かい}の施^せ肥^ひ(干^ほ鰯^{しか}・油^{あぶ}粕^{らかす}・堆^{たい}肥^ひなど、後^{のち}に練^に粕^{しかす})がなされる。大^{おほ}量^{りやう}の金^{きん}肥^びを投^な下^げする経^{けい}費^ひも必要^{ひつやう}で、多^{おほ}く^くの農^{のう}家^かを苦^{くる}しめた。い^いよ^いよ夏^かの土^{つち}用^{よう}ともなると収^{しゆう}穫^{かく}するが、刈^きり取^とった葉^は藍^{あい}はその日^ひのう^うち^ちに細^こかく刻^{きざ}まなくてはならないので、この作^{さく}業^ぎを夜^よ切^きりとい^いう。夜^よが明^あけると中^{ちゆう}庭^{てい}にムシ^{むし}ロ^ろを敷^しき詰^つめ、その上^{うへ}に細^こかく刻^{きざ}んだ葉^は藍^{あい}を唐^{から}竿^{さお}で打^うち、藍^{あい}摺^{すり}ですりつ^つぶし、よ^よく乾^{かん}燥^{そう}した葉^は藍^{あい}を高^{たか}台^{だい}から風^{かぜ}や^やり^りで飛^とばして葉^はの部^ぶ分^{ぶん}と葉^は脈^{みやく}や茎^{かき}の部^ぶ分^{ぶん}に分^わけてカマ^{かま}スに詰^つめ、秋^{あき}口^{くち}まで寝^ね床^{どこ}に積^つみ込^こんでお^おく。そ^そこ^こま^までの作^{さく}業^ぎを藍^{あい}こなしとい^いうが、秋^{あき}口^{くち}になると葉^は藍^{あい}を積^つみ上^あげた山^{やま}を作^{つく}り、水^{みづ}を打^うつて発^は酵^{こう}させ、菜^なに仕^し上^あげる寝^ねせ込^こみの作^{さく}業^ぎが始^はまる。

(学習のポイント)

- 1 藍こなし作業を順序に沿ってまとめてみよう。
- 2 藍こなしの作業はどうして必要とされていたかについて調べてみよう。
- 3 作業の歌である「藍こなし唄」を集めてみよう。
- 4 藍こなしに使用された農具について調べ、それぞれの特色をまとめてみよう。
- 5 藍の除虫はどのように行われていたかについて調べてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆水取り：水田がなかった藍作農村には、用水路も溜もなく、藍さいばいの栽培に必要な水は畑に井戸いどを掘り、その水を羽根つるべで汲み上げて、灌水かんすいするよりなかった。晩春ばんしゆん以後のこの作業は重労働の連続であった。
- ◆施肥：藍は、葉ふくに含まれたインディゴという色素しきその含有量がんゆうりやうと純度じゆんによって良質りやうしつの染料せんりやうが得られるが、そのためには多量きんぴの金肥きんぴの使用さを避けられず、播種はしゆから収穫しゆくの前まで7回ほどの施肥しはらが一般こまに行われていた。農民は不作だと金肥しはらの支払いこまに困ることもよくあった。高価こうかな金肥きんぴを大量ほどこに施すあつと、葉あつが厚くインディゴを多量がんゆうに含有りやうしつした良質りやうしつの葉藍あつが得られる。ところが、栽培農家では、なかなか肥代こえだいが都合ごうごできず、やむを得ず高利貸こうりがしなどから収獲しゆうかくしたときに葉藍あつでの返済へんさいを約束やくそくして肥代こえだいを前借りかんこうする慣行かんこうが一般化いっぱんかしている。そんなとき不作で返済へんさいできないことも生じた。それで畑の一部を高利貸こうりがしに取り上げられ、小作せうさくになる農家も増ふえていった。

むかし やかみざかい ほっけとう
 その昔 矢上境の 法華塔



矢上には南境に法華塔



矢上には北の境も法華塔

3代目徳島藩主の蜂須賀光隆(1630
 ~1666)は、祖母の敬台院のために
 矢上の正法寺の本堂を改築した。また、
 祖母と父忠英の位牌を安置する
 ために正法寺に総ケヤキ、二間四方
 の位牌堂を建立した。そして、正法
 寺を水害から守ろうと、あばれ川で
 あった正法寺川に堤防を設け、矢上
 村の北と南に「南無妙法蓮華経」と刻
 み込んだ題目石を建てて、村全体を
 聖域として安全をはかった。その
 背景には、祖母と父の冥福を祈るだ
 けでなく、蜂須賀家の危機を救い、
 徳島藩政の基礎固めのために努力を
 惜しまなかった祖母に対する感謝の
 心が表現されていたといわれる。
 現在の題目石は、ともに後世に建て

替えられたが、光隆が建立した場所に立っている。現在のもの
 のは、北側は文久3年(1863)、正法寺14代目住職日浩の時に
 京都の山道九左衛門によって、南側は明治40年(1907)、正法
 寺16代住職三妙院日校のときに森新太郎、森慶蔵の両氏によ
 って建立されたことが記されている。

(学習のポイント)

- 1 光隆の祖母、敬台院について調べてみよう。
- 2 正法寺には忠英と敬台院の雲形位牌があるが、その意味について考えてみよう。
- 3 正法寺を訪れ、住職さんにその歴史や本堂の特徴について話を聞いてみよう。
- 4 実際に題目石を訪れ、南北二つの石に囲まれた範囲がどのような地域であったのか地形図などを持って調べてみよう。
- 5 蜂須賀光隆について調べてみよう。

[用語の解説]

◆敬台院(1592~1666)：小笠原家から家康の養女となり江戸城で育てられた氏姫は慶長5年(1600)関ヶ原の戦の直前に福島正則の仲人により蜂須賀家政の嫡子で15歳の至鎮の正室としてわずか9歳の時に輿入れした。その後阿波を拝領した至鎮は、赤松則房の旧領、矢上城付近を氏姫の化粧料とし、そこに禅宗の寺院であった正岡寺を改宗して正法寺を開基した。

◆化粧料：正室などの所領(知行地)のこと。

◆敬台院画像：正法寺には敬台院の画像がある。これは徳島藩としては唯一の女性像として知られる。その装飾には蜂須賀家と小笠原家の両方の家紋が散りばめられていることに注目したい。敬台院の姿は、剃髪して出家した僧形で描かれている。

◆蜂須賀忠英(1611~1652)：徳島藩2代藩主。祖父の蓬庵とともに初期藩政改革を成功させたことは特筆しておく必要がある。特に興味深いのは長谷川貞恒を重用しているが、貞恒の建策を容れて柿原や興崎村(ともに現阿波市)を中心に原土制度を設けたことであろう。その他、業績が大きい藩主で、海部騒動で苦労したことも注目しておきたい。

たびびと ひといき いちりまつ
旅人が 一息ついた 一里松



名田の旧街道。吉野川を渡り、この街道を北上する。



右が徳命八幡神社。この辺りに一里松が植えられていたらしい。

はちすかいえまさ てんしろう
蜂須賀家政は天正13年(1585)6月に阿波国入部を果たすと、
その直後から徳島城の築城と城下町の町割りを開始、同時
に領内9か所に支城を置いて防衛体制を強化し、また領内の
商品流通の拠点を整備した。そして徳島城と9つの支城を結
ぶ、土佐・讃岐・淡路・伊予・撫養の五街道の整備を進めた。
この五街道を中心とした領内の主要街道には、ほぼ一里(約
4km)ごとに一里松を植えて道標とし、また旅行者が休息す
る便宜を図っている。これは他の地方で多い一里塚の設置と
同じ目的で設けられているのである。こうして一里松は道路
の両側にあり、とくに炎天下には一息入れることができるな
ど、それなりの役割を果たし、また道標として旅人を安心さ
せる機能も備えていた。町内では、徳島城下の佐古から大
坂越えに繋がる讃岐街道に沿って、徳命八幡神社の西側に一
里松があったことが文久3年(1863)に作成された「徳島及周
辺絵図」(徳島大学蔵)によって知られるが、今ではその姿
を全く留めていない。

(学習のポイント)

- 1 一里松の歴史について調べてみよう。
- 2 幕府が五街道などに設けた一里塚について調べてみよう。
- 3 徳島藩が一里松を植えた理由について調べてみよう。
- 4 四国遍路の道標以外の道標を探し出し、それぞれの道標を建てた理由を調べてみよう。
- 5 県下で一里松の遺構がある場所について調べ、史跡としての重要性について考えてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆支城（阿波九城）：蜂須賀家政が、四国征伐の直後の阿波領主（17万石）として入部すると、その直後に新しい居城として徳島城の工事に取りかかるとともに、領内9か所の要地に支城を設け、重臣を城番家老に任じてそれぞれの地域の防衛と農民支配の役割を担わせた。これは、入部当時の領主権力が万全でなかったことの表れで、この制度を支城駐屯制という。そのころ藍住町の村々は大半が板東郡に属していたため、撫養城番の益田氏の支配を受けていた。
- ◆一里松：幕府の直轄地や多くの藩では一里塚の制度がとられていた。徳島藩の一里松制度は珍しいものである。

ちからいし わかしゆ うでじまん
力石 若衆たちの 腕自慢



(住吉神社の力石 若い衆が力を競う力石 四十五貫目)



住吉の神社の前は競技場
(源義経が戦勝祈願をした神社)

住吉の住吉神社、名田や小塚の八幡神社、東中富の八坂神社などでは、昔は秋祭りなどのとき、各村内のちからじまん わかもの若者が、おおぜいさんばいしやにぎにぎけいだい大勢の参拝者で賑わう神社の境内で大きい石を持ち上げて覇を競う「力石大会」が人気を博して年中行事となっていた。当時の藍住町は毎年のように吉野川のよしのがわほんらんが氾濫して、太いに苦しめられていた。そんなとき、水害を防ぐため石や土嚢などを積み上げて、すいせいおうきゆう水勢を弱める応急の共同作業が必要となる。そのためにも、常に力をつけておくことが必要であった。そして、人々の生命を守るそなえとして、自然に流行したことのひとつが力石のきようぎ競技であった。その大会で一番重い石を運んだ若者の名と重量を石にきざきざめいよ刻み、その名誉を後世に伝えることにしていた。住吉神社や八坂神社、小塚の八幡神社の境内に保存されている力石には、かん35貫～40貫(1貫＝約3.75kg)などと重量を、また住吉神社のものは持ち運んだ人の名前を刻んでいる。まさに重量挙げげんしよけいたい競技の原初形態だといえようか。

(学習のポイント)

- 1 力石が保存されている場所の分布地図をつくろう。
- 2 力石とはどんな競技かについてまとめてみよう。
- 3 力石競技が盛んになった歴史的背景を考えてみよう。
- 4 力石について書かれた資料を探してみよう。
- 5 徳島県で力石競技が盛んに行われていた町や村を調べてみよう。

〔用語の解説〕

◆**力石**：江戸時代の藍作地帯の村々では、秋の祭礼行事などとして、大きく重い石を持ち上げて力量を競う競技が盛んに行われた。今も神社の境内などに力石を見かけることがある。

◆**藍住町の力石**：30貫余りの石を持ち上げる力石の競技は見物する人もその迫力に圧倒されたと思われる。住吉神社のものには「明ぼの」を名乗る力者が記録を更新したことを記念して力者名と重量が刻まれている。そのほか東中富の八坂神社と名田八幡神社の境内にも30貫ほどの石を持ち上げたことを刻んで、その栄誉を今日まで伝えている。競技会当日は、本番の前に子供たちの力石大会が実施されていたらしく、徳命八幡神社の本殿裏に小型の力石が数個最近まで保存されてきていたが、社地の整備で散失している。貴重な文化財であるので、何としても探し出して元の位置に保存したいものである。日常的な藍玉の運搬や、氾濫時の復旧作業に力仕事が避けられなかった江戸・明治の藍住町の若衆たちは、それに備えて力石の競技に親しんでいたが、例えば藍玉の重い俵を片手で差し上げるなどして、その稽古を怠ることは無かったようで、奥村家史料の絵画にその一コマが描かれている。

つち み かど じょうこうむか なんようだい
 土御門 上皇迎えた 南陽台



勝瑞の南陽神社



土御門上皇火葬塚

承久3年(1221)、承久の乱で敗れた土御門上皇は土佐に流された。その後、貞応2年(1223)に阿波に移り寛喜3年(1231)10月に没するまで滞留した。その行在所の所在地は阿波市土成町御所の御所屋敷、板野町下庄の栖養の森、鳴門市里浦のあま塚、鳴門市大麻町池谷の天王山、藍住町勝瑞など諸説ある。藤原定家の日記である『名月記』によると、行在所が海から遠く離れていなかったことや守護の居館に近い位置にあったことということが分かっている。このときの阿波守護小笠原氏の守護所の位置について諸説有るが、三好市池田町、美馬市脇町の岩倉城とともに勝瑞説がある。このことから勝瑞説は有力とされる。藍住町に残る伝承としては、勝間が淵に遊ばれた上皇は、菊花を愛され、「南陽の丘」と呼ばれた南陽神社付近に南陽離宮を造営したとされる。そして、寛喜3年(1231)に崩御され、井隈御火葬所で火葬されたということである。土御門上皇の火葬塚は鳴門市大麻町にある。

(学習のポイント)

- 1 土御門上皇の行在所の説がある各地を訪れ、どのような伝承があるか古者に聞いてみよう。
- 2 鎌倉時代の阿波守護所についても伝承のある各地を訪れ、古者に話を聞いてみよう。
- 3 承久の乱は、どのような戦だったのだろうか。
- 4 なぜ、承久の乱は起きたのだろうか。
- 5 承久の乱による世の中への影響はどのようなものだったのだろうか。

〔用語の解説〕

- ◆**承久の乱**：源氏が三代で滅亡すると、後鳥羽上皇は武家政権打倒の機と見て、承久3年(1221)に北条義時追討の院宣を出して挙兵した。しかし、全国の武士は義時の下に結集し、一ヶ月ほどで鎮定され、上皇は隠岐に配流の身となった。そのとき上皇に応じた阿波守護佐々木綱高は京で敗れて討ち死にし、それに代わっておがさわらながきよほにん小笠原長清が阿波守護に補任され、守護所を勝瑞に設置したと伝えられている。
- ◆**守護**：源頼朝が文治元年(1185)に全国66か国に有力御家人を派遣し、諸国の御家人を統制するため大犯3か条の執行を命じたことに始まる。地頭とともに守護を制度化することによって、鎌倉幕府の権力が強化した。
- ◆**小笠原氏**：守護として最初に阿波に入部したのは佐々木綱高であったが、佐々木氏は承久の乱で滅亡、その後阿波守護となったのが小笠原長清である。当時守護は、任国へは守護代を置き実際の政務を代行させたが、阿波へは嫡子の経高が守護代として入り、配流された土御門上皇を阿波に迎えた。

てま 手間かけた 藍は天下に かい と 買い取られ



正藍で染めた衣は一級品



藍玉の積み出し風景
〔紙人形の作者は河野操氏〕

藍が播種^{はしゆ}から玉搗き^{たまつ}まで、きびしい労働の成果であることは、他でも解説しておいたとおりである。しかし、その藍を有利に販売するための藍商たちの努力も忘れられない。それとともに阿波藍が全国の市場に進出したのは、その品質の良さが高く評価されたこと。そうでなくては全国市場を独占するようなことはできなかつた。それを立証^{りっしょう}する古文書として広島藩の三原町の紺屋^{こうや}仲間が藩に願い出た幕末の嘆願書がある。広島藩では藩内でとれた藍^{じあい}(地藍)の使用を押しつけていた。ところが品質が悪く(インディゴの含有量が低い)、染め上げに時間と手間がかかって儲けにならない。せめて最後の仕上げだけでも阿波藍の使用を許してほしいという切実な嘆願になっている。そんな阿波藍が進出した所では、久留米^{くるめがすり}紆・結城^{ゆうきつむぎ}紆・長板^{ながいたちゆうがた}中形・有松^{ありまつしほり}絞などの名高い織物を生み出したことを考えると、近世以降^{ふくしよく}の日本服飾文化を盛り上げるうえで、その果たした役割の大きさを正しく評価する必要がある。

(学習のポイント)

- 1 藍の産業に関係する栽培農家・藍師・藍商の仕事の特色を比べてみよう。
- 2 寝床株・売場株とはどのようなものか、それと徳島藩の関係について考えてみよう。
- 3 阿波藍の品質が優れていた理由を調べ、まとめてみよう。
- 4 阿波藍の使用で生まれた全国の名産品について調べてみよう。
- 5 藍師の屋敷の建築上の特徴について調べ、平面図を作ってみよう。

〔用語の解説〕

- ◆三原城下町：広島藩東部に置いた支城しじょうの城下町で、主として備後びんご国経営の中心地とされ、また交通上の要地として注目された城下町である。
- ◆地藍：阿波で産する良質りょうしつの藍のことを正藍しょうあいとか本藍ほんあいというのに対し、阿波以外に産出する藍のことを地藍という。
- ◆玉搗き：薬すくもに藍砂あいすなを混ぜて搗き固めて藍玉あいだまを作ったが、それには大きい木臼きうすで半日ほどかかる。徳島藩では藍玉にしなくては販売させなかった。
- ◆阿波藍：吉野川流域の平野で産出した阿波藍は土壌どじょうに恵まれ、農民たちの努力と技術によって優れた製品を全国の市場に供給していた。その中でも久留米餅や結城紬などの名産品がもてはやされるようになったので、ますます阿波藍に対する需要じゅうようは高まりを見せるに至った。そうした阿波藍と著名な織物生産の関係にも注目しておきたい。

とみよし しょう なごり みや もり
 富吉の 荘の名残の 宮の森



富吉の庄の鎮守は八幡さん



鬱蒼と樹木が茂る宮の森

現在の藍住町東中富の北部から富吉の地域は、富吉荘の
 荘域であったとされる。東中富の敷地傍示という小字名が
 荘内にあった北敷地村、南敷地村の遺称地と考えられている。
 富吉荘は皇室領を経て後に臨川寺領となるが、至徳2年(1385)
 の臨川寺三合院領目録に「富吉庄内東村并北敷地南敷地」と
 みえる。地頭については、永仁4年(1296)12月18日に鎌倉両
 執権から富吉荘を藤原兼郷の領地とするとして下知状があ
 る。藤原兼郷は、漆原兼敦(西念)の孫であるが、建武3年(1
 336)の文書には「阿波国富吉庄西方地頭漆原三郎兼有」と
 あり、漆原氏が地頭職を相伝していたようである。漆原氏の
 後裔は、戦国時代には川端氏を名乗り、川端城に入ったとき
 れる。富吉八幡宮は、13世紀末に藤原兼郷によって勧請さ
 れ、当初は本村にあったが、江戸時代後期に周辺にあった九
 社が合祀された。竹瀬村、本村、成瀬村、乙瀬村、川端村、
 奥野村の産土神である。

(学習のポイント)

- 1 地形図や空中写真を使って、富吉周辺で集落が形成されそうなところを調べてみよう。
- 2 富吉八幡神社の由来について、古者に尋ねてみよう。
- 3 荘園という私有地が成立した歴史を調べてみよう。
- 4 地頭は荘園の中でどのような役割を与えられていたのだろう。
- 5 藍住町内には富吉荘以外にどんな荘園があったかについて調べてみよう。

[用語の解説]

- ◆臨川寺：京都市右京区嵯峨天龍寺造路町にある臨濟宗天竜寺派さがてんりゅうじつくりみちちよう りんざいしゅうてんりゅうじ はの寺院。後醍醐天皇は建武2年(1335)に夢窓疎石を開山とし、文和2年(1353)に足利尊氏が十刹の官寺ごだいごてんのう むそうそせき ぶんなとしている。細川管領家あしかがたかうじ じっせつ かんじ かんねいけとも深く繋がるが、応仁の乱で荒廃する。今の三会院は夢窓疎石つな おうにん ちん こうはい さん ねいんの示寂地じじゃくのちといわれ、中門の「三会院」額がく あしかがよしみつは足利義満の筆という。
- ◆下知状：下知とは、上位の者から下位の者に対する命令のことで、下知状は命令を伝える文書。
- ◆地頭職：源頼朝みなものよりとも ぶん ちが文治元年(1185)に全国の荘園や公領しやうえん こうりやうに置き、荘園内の治安維持や年貢の徴収い じ ねん ぐ ちやうしゆう たんとうを担当させるため、荘園の11分の1の土地を[あてがった](#)。その領主権りやうしゆ しきを職という。

なかとみ あわ と さ けつせんじょう
中富は 阿波と土佐との 決戦場



中富の戦で副将戦死する
(赤澤信濃守像・愛染院蔵)



中富川土佐との合戦血に染まり
(現在の前川)

てんししょう しんこう
天正3年(1575)から阿波侵攻
を始めた土佐の長宗我部元親は、同年海部城、宍喰城おとを陥した。同時に阿波の西からも侵攻していた元親は、翌年に池田白地城を攻め、城主大西覚養は元親に降りた。さらに、天正5年には日和佐城かんらくが陥落、勝瑞とを取り巻く軍事的緊張は一きんちよう気に高まってきた。勝瑞城主の十河存保は、同族の三好康長を通じて織田信長おだのぶながに救援を依頼した。信長は、元親に対して淡路方面から大軍を送り込み、一時三好勢は勢いを取り戻した。しかし、天正10年(1582)6月に信長が本能寺の変で倒れると、織田軍は退去した。この状勢を見た元親は、一気に勝瑞近くまで攻め寄せた。土佐勢2万3千に対し、存保は阿波・讃岐の三好氏配下の将兵5千余をもって勝興寺(矢上)城に本陣を構え、2千人を先陣として中富川河畔に陣地を築き、決戦に臨んだが、阿波勢は壊滅的な打撃を被った。存保は1か月ほど勝瑞城ろうじょうに籠城したが、9月、讃岐へ退去した。

(学習のポイント)

- 1 天正期の戦国大名の勢力範囲について調べてみよう。
- 2 戦国時代とは、戦乱の時代であるが、阿波国内での戦乱について、いつ頃から始まったのか調べてみよう。
- 3 徳島の戦国時代の城について調べてみよう。
- 4 阿波を制圧した長宗我部氏は何故勝瑞に入らなかったのだろうか、考えてみよう。
- 5 阿波で長宗我部氏が入った城はどこだろうか？また、その城は、他とどのような違いがあるのだろうか。

〔用語の解説〕

- ◆**白地城**：三好市池田町白地やまじろにあった山城。天正4年(1576)、城主の大西覚養は土佐の長宗我部氏に攻められ降伏した。その後、長宗我部氏の四国平定きよてんの拠点となり、ここを足がかりに阿波東部、讃岐、東予へと兵を進めた。
- ◆**大西覚養**：戦国時代の阿波の国人領主こくじんりょうしゅ。三好家と密接みつせつな関係を築き、白地城を拠点としてその支配地域しはいちいきは東予にまでも及んだ。長宗我部氏に降伏し、天正6年(1578)、重清城しゅじょうの守備まかを任されるが、まもなく十河存保ついできに追撃され討ち死にした。
- ◆**三好康長**：三好一族の一人で、河内高屋城かわちたかやじょうを本拠とした。織田信長の四国征伐の際、三好一族として四国攻略の担当たんとくとされ、天正9年(1581)、四国征伐の先鋒せんぽうとして阿波に入った。しかし、天正10年に本能寺の変で信長が殺害されると康長は河内へ帰った。
- ◆**本能寺の変**：天正10年(1582)6月2日、織田信長の家臣明智光秀あけちみつひでが謀反むほんを起こし、本能寺しゆくはくに宿泊おそしていた主君信長を襲い、自刃じじんさせた事件。

ニンジン^{あじ}は ^{さんかく}味・^{にほんいち}産額も ^{さいばい}日本一



藍住のニンジン他県で喜ばれ 苦勞して育てたニンジン晴れ姿

早春^{しゅつか}から出荷する洋ニンジン^{さいばい}のトンネル栽培は、藍住町一帯に広がっていて、町を代表する園芸作物。ニンジン^{さいばい}はカロチン^{ふく}を含む健康野菜として、また料理^{いろど}を彩る食材でもある。トンネル栽培とは大型のビニールハウスで寒季に育てる特殊な栽培技術^{さいばいぎじゆつ}を利用することから名付けられたもの。この栽培方法は、今から半世紀も以前に町内で普及していた白瓜^{ふきゆう}（奈良漬^{しろり}けの原料）に代わって、急速に発展したといわれている。こうした洋ニンジン^{たであい}の大産地となったのは、歴史的に蓼藍生産地^{でんとう}の伝統^{どじよう}や良好な土壌、よく働くという特性^{とくせい}が育てた集約農業として展開されたことを忘れてはならないだろう。ニンジン^{てんかい}の収穫^{わす}が終わると、そこは全て水田となり、一年中農地として有効に利用されている。トンネル栽培は町内の奥野^{しゆうかく}から始まったが、今では徳島市^{すべ}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}^{きようみぶか}^{ゆうこう}^{おくの}^{かくだい}^{おうじんちよう}^{りんせつちいき}^{あい}^{すいたい}に隣接地域にも栽培面積が拡大されている。藍の衰退後の農業史を調べてみるのも興味深いことである。

(学習のポイント)

- 1 藍が衰退した明治30年代から後、藍住町の農業は今日までどのような経緯をたどってきたか。
- 2 洋ニンジンの栽培から出荷するまでの作業工程をまとめてみよう。
- 3 洋ニンジンが健康食材といわれる理由をまとめてみよう。
- 4 藍住産洋ニンジンを素材として、どんな食品が作られているのだろうか。
- 5 藍住産洋ニンジンは、どんな方面に出荷されているのだろうか。

[参考資料]

- ◆ 藍住町で主に栽培されてきた農作物：江戸時代から明治20年後半までは阿波藍の特産地として全国にその名が知られていた。明治の後半から昭和の初め頃まではたくあんの原料になる大根が作られ、昭和30年代までは奈良漬の原料となる白瓜が栽培された。昭和35年頃からは洋ニンジンの栽培が行われるようになった。
- ◆ 洋ニンジン栽培の経緯：昭和35年に奥野の宮本勇氏がビニールハウスによる洋ニンジンの栽培を初めて試みた。宮本氏は、「最初の頃は施肥量やビニールに付着する水滴などで失敗の繰り返しだったが、農協青年部の協力で徐々に栽培面積が広がっていた。」と話している。昭和60年以降は新品種の導入によって収穫量が急増し、主に東京や京阪神へ出荷されるようになった。春ニンジンでは藍住町が全国一の生産量を誇っている。
- ◆ 藍住産洋ニンジンの特色：藍住産の洋ニンジンは味や色、姿がよく、そのうえカロチンなどの栄養価が高く、健康食材として珍重されている。

ぬくもりが こころ つた 心に伝わる せつたい お接待



今も、様々な場面でお接待の文化が受け継がれている

いまでは遍路道から外れて、また札所寺院が一箇か所しょもない藍住町は、近世の中期から明治30年頃まで、四国霊場1番の霊山寺（鳴門市）と、17番井戸寺（徳島市国府町）の間を往来する遍路の多くが、小塚の渡しなどを利用して町内を往き来していた。遍路が最も多いのは春の彼岸の頃、それに次ぐのが秋の彼岸の前後であった。この遍路の苦行を助けるため沿道の在所の人々は、渡し場や路傍で湯茶を用意し、金品を集めて遍路に与え、少しでも苦行を和らげようとする習俗が見られるようになった。それを接待行というが、接待をすると四国遍路をするのと同じ御利益が得られるという教えが信じられていた。しかし接待はそれだけでなく、各地からの遍路たちとの交流を楽しみ、また多くの情報が得られる機会でもあったので、私たちの祖先は接待行に積極的に参加したといわれている。その他に、宿に困る遍路を泊める「善根宿」という風習もあったことを知っておきたい。

(学習のポイント)

- 1 接待という風習について学習してみよう。
- 2 接待が盛んに行われた理由について調べ、まとめてみよう。
- 3 接待はどんな場所で行っているかについて調べてみよう。
- 4 接待をするために、在所にどんなグループがあり、どんな準備をしたかについて調べてみよう。
- 5 よろこんで接待するようになった理由を調べ、また接待する人はどんな利益があると考えていたのか、多くの人に尋ねてみよう。

〔用語の解説〕

◆接待：お接待をすると四国遍路をしたのと同じ御利益が得られると言われ、在所の大師講中が金品の寄進を集め、特に春の彼岸の頃に沿道の茶堂という仏庵などで接待が行われた。その他に難儀しているお遍路を助けることも日常に行われていて、青年たちの接待組も村ごとに活動していた。特に足の不自由な遍路はちょっとした小屋ほどもある轆車に乗り、家族たちが巡拝していた。その大きな車が山や川の渡し船に乗せるのも大変だった。そんなとき若衆組の出番となる。こうした接待行為は村内通過の車を村境まで送り、隣村の若衆組にバトンタッチしたのである。

◆善根宿：旅宿に難儀している遍路を我が家に泊める善根宿の慣行も盛んで、遍路はその家の祖霊に読経して供養し、家人は他国の遍路から珍しい話を聞くなどして楽しんだもので、遍路はその家の迷惑にならないために早立ちをするのが一般的であったとされる。

ね せ こ ん の くろ う み ごと あい う
寝せこみの 苦勞が見事な 藍を生む



出来栄えを競う藍師の水加減



藍染めの菜づくりのきり返し

寝せ込み作業が行われている加工場を寝床ねどこという。寝床は熱を逃がさない構造をもつ特殊な建造物で、二階を持つ寝床は二階の床にも土をあげて固め、菜づくりができる構造になっている。一山の葉藍はほぼ5反ほどの畑から穫られる葉藍を積み上げている。その発酵温度の最高は摂氏70度ほどになるが、それらの葉藍を万遍なく発酵させるには、山を崩して水分が足りない部分に水をやり、山を移動させる。この作業を切り返しとって、その移動を菜が仕上がるまで何度となく繰り返す。この作業中は寝床一面にアンモニア臭が立ちこめ、苦しい作業が続けられる。そのうち発酵温が平温に下がったところで菜せんりようという染料の出来上がりとなる。やがて買い手が買い付けに来ると、その品質を調べたうえ(手板法)、注文に応じて木臼で搗き砂を混ぜて固めた藍玉に仕上げて全国の市場に向けて出荷するが、徳島藩では菜を売ることを、厳しく禁止していたことは注目しておきたい。

(学習のポイント)

- 1 寝床とはどのような建物か詳しく調べてみよう。
- 2 1山の葉藍から何俵の薬ができるだろうか。
- 3 水師という職人は寝せ込み作業の中で、どんな役割を担っていたかについて調べてみよう。
- 4 染料として薬に仕上げると、どのような効果が期待できたのだろうか。
- 5 現在の薬づくりはどのように変化を遂げているか、また変化しない点も調べて、その理由をまとめてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆寝せ込み：こなされた葉藍5反分を山積みし、水を打って発酵させたものを、移動を繰り返しつつ万遍に発酵させて薬に仕上げる工程をいう。
- ◆寝床：寝せ込み作業を行う薬の加工場のこと。部屋は一定の保温機能を備えていなくてはならないので、様々な構造上の特色を持っている。
- ◆切り返し：積み上げた葉藍は崩しながら水打ちをし、何回となく山を移動する作業のこと。
- ◆手板法：薬を練って加賀紙に押し、明かりにすかせて色調を見分けて品質を鑑定し、取引の価格を決める。この鑑定の仕方を手板法という。
- ◆水師：寝せ込みのとき、水打ちを指示する専門の指導者を水師といい、水師の水加減で良質の薬を得ることができたと言われている。

のきした い のつ しろ ゆめのこ
 軒下に 渭津の城の 夢残し



徳島城塩蔵の古材で建てられた
 奥村家住宅の大門



徳島藩の定紋(卍文)の瓦が使用されている奥村医院の蔵

おくむらけじゅうたくけんぞうぶつぐん
 奥村家住宅建造物群(県指定有形文化財)のうち、正面の大門は明治8年(1875)の建築である。この門は、徳島城を国が解体したとき、奥村家が塩蔵と附属する門や板塀などの古材を115円で一括購入し、隣の新宅の建築に使用した残りの古材で建てたものである。支払った金額の内訳は、仲介した若木屋に10円、解体費に3円、舟で運んだ運送費に2円、国に100円であったことが記録されている(新宅普請買物帳)。そのとき建てられた新宅(奥村医院)には主屋や土蔵がそのまま残されている。奥村家の正門はそれまで東の門であったが、南に徳島城の古材で大門を建てたため、この門を正門とすることとなり、同時に門の脇に番屋も建てられている。なお塩蔵門は扉が高すぎることから屋敷のバランスを崩すとして使用せず、そのまま東寝床に保存されている。なお、奥村医院の蔵の瓦には蜂須賀家の定紋が入った瓦頭もあり、徳島城の歴史を偲ぶことができる。

(学習のポイント)

- 1 徳島城はどのような理由で解体されたのか、よく調べてみよう。
- 2 徳島城の塩蔵の位置や、寺島川との関係を古図で調べてみよう。
- 3 徳島城の古材を使用した建造物が藍住町の周辺にあれば、それについて調べてみよう。
- 4 「新宅普請買物帳」を調べ、そこから研究をまとめてみよう。
- 5 「番屋」とは何に使われた建物かを調べ、その構造や役割について考えてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆**塩蔵**：徳島中央公園の城山西登口の南、JR構内に旧寺島川からふないりの舟入の石組みが現存する。そこから荷揚げした塩などの物資おくゆきを運び入れた建物が塩蔵で、正面21間・奥行3間の建物と、門と塀へいは明治8年(1875)の徳島城総体取り壊しのときに、他の建物とともに民間人に払い下げられ、奥村家が買い取った。
- ◆**新宅普請買物帳**：新宅とは奥村家番頭つとを務めた奥村寅之助とらのすけで、当主嘉蔵かぞうの弟の嘉蔵が塩蔵を買い取った機会に寅之助は分家し、その屋敷は塩蔵の古材で建てた。その経費一切を書き上げたのがこの買物帳である。買物帳には塩蔵の買上げ、解体、輸送ゆそうの費用を記録していることは興味深い。
- ◆**番屋**：新宅の建築で余った古材を使用して現在の大門を築くと、東寢床せつに接する片隅かたすみに番屋を建て、来客おうたいの応対に利用した。
- ◆**東寢床**：東寢床は慶応3年(1867)に新築しんちく、その後、明治30年代に藍あいの市況しきやうが悪化すると、東寢床を改造して養蚕用かいぞうとした。そのときの煙出しけむだがこの建物の棟に見られる。

はる 遙かなる やしま 屋島をめざした ちどり はま 千鳥浜



住吉の神社で義経勝ち祈り



義経が渡った場所は千鳥浜

ぶんじ 文治元年(1185)、平家を討つために屋島を目指して進む
みなもと の よしつね かつうら 源 義 経 は、勝浦に上陸した後、まず阿波の平家の拠点であ
さくらまじょう せ たぐちしげよし さくらぼのすけしげとお
った桜間城(徳島市国府町)を攻めて田口成良の弟桜庭介重遠
を敗走させた。その後、さらに軍を進めたが大きな川に阻ま
わた れ、渡るのをためらっていたところに白鷺が舞い降りて義経
しらさぎ ま お よしつね
一行を案内したといわれている場所が千鳥ヶ浜である。現在
ちどりがはま げんざい
は開発が進み、当時の面影はほとんど無いが、かつては千石船
おもかげ せんごくぶね
の出入りしていたところであるらしい。川を渡った義経一行
すみよし きはら きの かん
は、住吉神社に戦勝を祈願している。そのとき、後から追
べんけい むち ふじ えだ さか つ た
ついた弁慶が鞭として持っていた藤の枝を逆さまに突き立て
ていったものが芽を吹いたという逆藤の伝説はよく知られて
おり、周辺の地名にもなっている。150騎という義経軍はこ
おおさかとうげ こ
こから大坂峠を越えて、馬宿(東かがわ市引田)を経て屋島に
とうちやく たつ こく
到着し、同年2月19日の辰の刻(午前8時)、合戦の火ぶたが切
あづまかがみ
られた(『吾妻鏡』)。

(学習のポイント)

- 1 千鳥ヶ浜を歩いて、義経の軍勢が住吉神社までどのように進軍したかを考えてみよう。
- 2 住吉神社の由緒について調べてみよう。
- 3 義経が次に行った板野町の金泉寺に伝わる伝説を調べてみよう。
- 4 義経の屋島への進軍ルートを調べてみよう。
- 5 逆藤の伝説などを古者に尋ねてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆源義経(1159~1189)：河内源氏である源義朝の九男として生まれる。幼名を牛若丸。兄、源頼朝が平氏打倒の兵を挙げるとそれに合流し、一ノ谷の合戦や屋島の合戦、壇ノ浦の合戦に勝利するなど、平氏を滅ぼす最大の功労者となった。しかし、頼朝の怒りをうけ、奥州平泉で自害に追い込まれた。
- ◆田口成良：阿波の豪族で平家の家人。
- ◆弁慶(?~1189)：怪力の荒法師として名高いが、その生涯についてはほとんど分かっていない。京都五条の橋で義経に出会い、最期まで義経に仕えた。
- ◆吾妻鏡：鎌倉時代後期に成立した日本の歴史書で、全52巻ある。鎌倉幕府の初代将軍・源頼朝から第6代将軍・宗尊親王まで6代の将軍記という構成で、治承4年(1180)から文永3年(1266)までの鎌倉幕府の事績を日記体で記している。

ひとすく けいしんたん きつげくすり
人救う 敬震丹は 気付薬



犬伏家敬震丹でなお栄え



中富に犬伏左近の墓祀り

いぬぶし せんぞ
犬伏家の先祖は戦国時代には三好氏の家来で、犬伏城(板
野町)の城主じょうしゅであった。また、江戸時代の初期には東中富村
の豪農で政所をつとめた。薬業の始まりは、家伝によると、
江戸時代に当家に持病のために歩行困難こんなんになった旅人が助け
を求めて訪れ、手当おとずを加えるうちに数日後には病が全快し、
旅人は大いに喜び、恩おんに報むくいるために薬せいほうの製法でんじゅを伝授したこ
とによるとされる。この製法に従って調合した薬を「龍虎圓」
と名付け、近隣きんりんに施ほどこしたところ、とても良く効きいたそうであ
る。その後、天保2年(1831)第7代犬伏左衛門(直五郎)
は、当時の徳島藩医橋 春庵たちばなしゆんあんと相談し、龍虎圓しよほうの処方しょほうに改
良を加え、薬名を「敬震丹」と改め、気付薬として販売した
ところ、幕末ばくまつには他国から薬を求めて訪れるようになり、そ
の経営は隆盛けいえいを極めた。その後、さらに処方りゅうせいに改良きわを加え、
明治時代中期げんざいに現在の処方となった。

(学習のポイント)

- 1 「敬震丹」とはどんな薬であるかについて調べてみよう。
- 2 善根宿という遍路慣行の特色は何かを調べてみよう。
- 3 徳島県は製薬の盛んなところとして知られているが、犬伏製薬の他にどんな製薬会社があるだろうか。
- 4 「敬震丹」は、どんな病気に薬用効果があるか調べてみよう。
- 5 「政所」という歴史用語について調べ、近世初期の村の中でどんな役割を担った役職であったか発表しよう。

〔用語の解説〕

- ◆**政所**：藩政初頭（関ヶ原の戦前）は庄屋のことを政所と称した。政所をつとめたのは中世この方、村方において武士的な存在であった有力者の多くが兵農分離の結果政所となったことに注目しておきたい。
- ◆**橘春庵**：勝瑞村にいた藩の医師として知られた人物。
- ◆**敬震丹**：薬草を調合した気付薬で、特効薬として全国に名を轟かせた漢方薬。犬伏製薬では、現在でも広範な販路をもつ著名な妙薬である。

ふうせつ た のこ しか はか
風雪に 耐えて残りし 鹿の墓



大和から阿波への使い鹿の墓



鹿の墓春日の神に見守られ

春日神社の前に鹿の姿が陽刻された珍しい石碑がある。
この鹿は奈良の春日大社から海を渡って矢上の春日神社まで
絶えず往復していた神様の使者であったとされる。その鹿が
ここで亡くなったとき、その死を惜しんで村人たちがこの石
碑を建てたという伝承がある。付近は、正保期(1644～1648)
玄賀上人によって開基された延寿院という寺の跡地であり、
その境内に鹿の墓は建てられたという。延寿院は春日神社の
宮ノ坊であったとされる。東光寺境内にも同型の碑があるが、
寛政期(1789～1801)に鹿園という講中で奉仕していた奈
良の春日社より贈られた二頭の鹿が死んだときにそれぞれ延
寿院と東光寺に埋葬したという言い伝えも残る。東光寺の鹿
の墓には寛政12年(1800)の紀年銘がある。伝承によると、
子どもの百日咳などは、この鹿の墓にお願いすると直して
くれるといわれている。お願いするときには、鹿の好きな千
本のぼりを作って立てるらしい。

(学習のポイント)

- 1 矢上の付近を調べて、鹿の墓が元あった場所を確認しておこう。
- 2 延寿院という廃寺のことについて調べてみよう。
- 3 鹿の墓に関わる伝説を集めてみよう。
- 4 江戸時代にこの村が藩の狩場に近かったといわれるが、鷹狩りと鹿の墓が関係するかどうか考えてみよう。
- 5 町内に鹿の墓のほか、馬や犬の墓があることを調べてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆延寿院：延寿院という寺名または庵名あんは、どの文献資料にも記載されていない。あるいは、修験関係しゅげんの仏堂ぶつどうの存在も考えられるが、調べようがなく、伝承あつかとして扱うよりない。
- ◆鹿の墓：矢上の春日神社は、奈良の春日大社の末社で、大社から末社に対する連絡れんらくに往來おうらいしていた鹿の霊れいを供養くようするために在所の人たちが造立ぞうりゆうしたと伝えるほか、この付近は藩の狩場で、射殺された鹿の霊とむらを弔うために建てたという異説いせつもある。
- ◆宮ノ坊：神仏習合しんぶつしゅうごうの時代には、神社の経営けいえいは宮ノ坊という寺院の僧侶そうりょにより行われていた。前記の延寿院がその宮ノ坊であったことも十分考えられる。

へいじょう ちようまい おさ はたのまひと
 平城に 調米を納めた 秦真人



平城京に復元された大極殿

平城京で出土した木簡

〔写真提供は奈良文化財研究所〕

律令制の下では租・庸・調といわれる租税制度があった。租は田一反につき2束2把の田租、庸は労役やその代納物として布・錦・米・塩などが、調は繊維製品や代納品として地方の特産品が都に納められた。平城宮の発掘調査で「阿波国板野郡井隈戸主波多部足人戸・秦人豊日白米五斗」「阿波国板野郡井隈郷・戸主海部馬長戸同部」と記された木簡が出土している。これらは、その土地の特産物を納めた「調」に付けた荷札で、井隈郷から白米が都に納められている。ここに記された秦氏は、古代の有力な渡来系の氏族で、高い財力と技術力を持っており、山城国葛野郡(京都市太秦)を本拠として近畿一带に土木や養蚕、機織りなどの技術を發揮して栄えた。平安遷都に際しても秦氏の財力・技術力が重要であったとする説もある。井隈郷においても秦氏はその技術力を發揮し、主としてここでは米作が行われていたであろうことが、この平城京出土の木簡から窺い知ることができる。

(学習のポイント)

- 1 律令制の時代に公民が負担した「調」というのはどのような租税であったのだろうか。
- 2 当時、阿波からはどのようなものが都へ納められていたのだろうか。
- 3 公地公民制について、土地制度としての特色を考えてみよう。
- 4 当時の租税を負担した戸とは何かについて調べてみよう。
- 5 「調」などの租税を平城京にどのようにして輸送したのかについて調べてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆**律令体制下の租税**：日本の律令制においては、人民統治のために戸籍と庸・調の税を徴取するための台帳である計帳が作成され、毎年更新されていた。そして、国は戸籍をもとにして、一定の資格を持つ者に対して一律の田を口分田として班給した。田地の班給を受けた者は、田祖を納税する義務を負い、庸・調なども負担する義務が課せられていたのである。
- ◆**木簡**：墨で文字を書くために使われた細長い木の板。紙が普及するまではその代用品として使われており、用途により、文書木簡や付札木簡、その他の用途に使われた木簡に大きく分けられる。10世紀以降には文書木簡は見られなくなる。削って何度か使用できるのが特徴である。平城京で出土した「井隈郷」の名が見える木簡は荷札として使用された付札木簡で、勝瑞の発掘調査ではまじない札である呪符木簡やこけら経が出土している。

ほし 星かぶと あ わ ぐん だん 阿波軍団の い ぶ つ よき遺物



小塚から出土してきた星兜



現在の観音庵

星兜とは、平安時代に発生した兜の一形式で、兜本体を形成する鉄板を接ぎ留める鋳の頭を星と呼ぶところから星兜の名が付いた。この星兜は、宝暦年間(1751~1763)に、吉野川に大水が出た後、小塚の川底から発見されたと伝えられるもので、鉄五枚張星兜鉢といって兜鉢高11.4cm、前後径18.7cm、を測る。その作られた時期は平安時代初期とされ、日本最古のものである。出土したいきさつには、井戸を掘ったときに出たとする伝説もある。星兜は、小塚にあった観世音菩薩を祀った小庵に保管されていたため「観音庵の星兜」と呼ばれた。この兜は、江戸時代後期には藩の御用絵師によって描かれたり、藩の甲冑師によって鑑定されたりするなど、人々に知られた存在となっていたようである。昭和59年2月9日に藍住町の有形文化財(工芸品)に指定され、保護されている。破損や腐植もあるが、元興寺文化財研究所で保存処理を施し、現在藍住町歴史館「藍の館」に展示されている。

(学習のポイント)

- 1 平安時代の阿波や藍住町はどのような様子だったのだろうか、いろいろな資料で調べてみよう。
- 2 江戸時代の人々は、この兜に対してどのような評価をしたのだろうか。
- 3 実際に藍の館でこの星兜を見て、観察してみよう。
- 4 甲冑の変遷について調べてみよう。
- 5 保存処理とはどのようなことをするのだろうか、調べてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆小庵：観世音菩薩を祀った小庵で観音庵と称したが、兜を置いてあるので俗に兜庵といわれた。明治時代末に改築し、後に部落の集会所として利用されていたが昭和40年頃に取り壊された。現在は集会所が建てられている。
- ◆甲冑師：甲冑師とは、甲冑を製作する職人のことで、具足師ともいう。古墳時代から始まった甲冑作りは中世に入ると武士の時代になり、同時に日本独自の甲冑形式が成立した。そして、戦乱の世に需要が増し、様々な形態の甲冑が誕生したが、江戸時代に入り太平の世となると需要は激減した。明治時代には需要が無くなったため、甲冑師はその高い技術を工芸品に活かし、海外に対して日本の加工技術の高さを示した。

まさやす ふりゆうおど せんきま
 存保は 風流踊りで 戦機待つ



都で流行っていた風流踊り
 〔洛中洛外図屏風・上杉本
 (米沢市上杉博物館蔵)〕



江戸時代の徳島の盆踊りを描いた「徳島孟蘭盆組踊之図」
 (個人蔵、写真提供は徳島市)

てんしやう ぼん そごう
 天正6年(1578)の盆のころ、阿波三好氏を束ねていた十河
 まさやす やかた よ げいのうしゆうだん
 存保は、勝瑞の館で京都から呼び寄せた風流踊りの芸能集団
 に時代の先端をゆく踊りを演じさせている。舞台はもとより、
 せんたん えん ぶたい
 見物席である棧敷も立派に設け、広く庶民に見学させていた
 さじき りつぽ もう しよみん
 ことが『三好記』に詳しく記されている。そのころは畿内
 かつやく おおおじ と さ ちようそがべもとちか ぐんぜい
 活躍した大叔父の三好康長が土佐の長宗我部元親の軍勢を阿
 波から敗走させ平和を取り戻していたときで、踊りを見物し
 ゆめ
 た人々は夢のような世界を心から楽しんだらしい。この踊り
 でんどうてき はってん いしやう
 は伝統的な田楽などから発展したもので、その衣装や持ち物
 か び かざ
 にも華美の限りをつくし、見物人を感動させたといわれている。
 しりやう
 この資料にはそのことが一部分ではあるが具体的に書か
 きやうみぶか らくじやう
 れていて興味深い。その後、天正10年に勝瑞落城、同13年の
 はちすかいえまさ はいきよ
 蜂須賀家政の阿波入部で勝瑞の町は廢墟となり、町人の多く
 いじゆう せいこう
 は徳島城下に移住するが、新天地で盛行した春日祭の大踊り
 さいげん
 は、勝瑞の風流踊りを再現したものと考えられている。

(学習のポイント)

- 1 十河存保について調べてみよう。
- 2 風流踊りとはどんな踊りであったか、その芸態について調べてみよう。
- 3 天正6年というのは阿波三好氏にとってどのような年であったかを調べてみよう。
- 4 『三好記』の風流踊りに関する部分をよく読んでみよう。
- 5 勝瑞の風流踊りを継承したとされる徳島城下の大踊りについて、文献で調べてみよう。

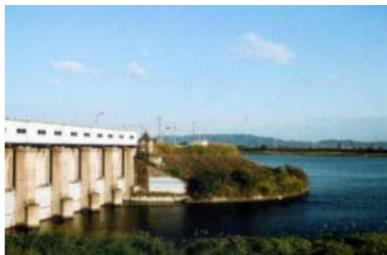
〔用語の解説〕

- ◆**風流踊り**：風流とはもともと人目を驚かすような衣裳や物物を用い、観衆を魅了するような大規模な芸能で、中世には京都や奈良などで人気を博していた。戦国期には武家社会にももてはやされ、管領家の細川家でも風流のチームが結成され、将軍の前でも盛大に演じたとされている。風流は武家の間にも盛んに演じられており、よく知られているのは豊臣秀吉の醍醐の花見で演じたものであろう。京都では風流の芸能集団も活躍するようになるが、勝瑞城で演じたのはこうした専業の風流集団であった。そのときの詳しい記録は福島玄清の『三好記』にあり、そこには見物した人々を大いに興奮させたことが記されている。このことが、後に徳島城下で組踊り(風流躍り)を盛行させる背景となったのだろう。

みごと だいじゅう せき くい
見事にも 第十の堰は 杭でもつ



松の杭打ちで第十の堰残る



第十の樋門で洪水調整し

昔の物資輸送は陸上よりも水上が生産地と藩の中心市場を結ぶ有利な方法であった。徳島藩では吉野川や那賀川とその支流の河川交通は、藩の経済を支える重要な輸送路であった。ところが吉野川の本流は旧吉野川で、現在の板野・名西両郡では別宮川など水量の乏しい河川が流れてはいたが、徳島城下と中上流域を結ぶ水上輸送は不可能であった。そこで第十村と姥ヶ島村の境に水路を設け、旧吉野川から別宮川に分水した。すると別宮川が本流となり、城下と上流一帯との商品輸送の困難は解決した。これが寛文期のことである。しかし今度は、分水で水量が激減した旧吉野川流域農村で水不足と干害で耕作に支障が生じた。そして、流域の村々から嘆願が藩に寄せられ、分水量調節を図るために第十堰が構築された。当時の技術を駆使して、堰は杭と蛇籠で基礎固めをしている。「じいさんばあさん杖でもつ、第十の堰は杭でもつ」とは建設当時の元禄のころから最近までよく耳にした古諺である。

(学習のポイント)

- 1 『板野郡誌』や『藍住町史』などから、第十堰がつくられた理由についてまとめてみよう。
- 2 元禄のころに河川に堰をつくる技術にどのような方法があったかについて調べてみよう。
- 3 吉野川下流域の地形図をよく調べて、大小河川がどのように利用されてきたかについて考えてみよう。
- 4 『吉野川事典』(農文協)という本から、大正期までの吉野川がどのように流域住民と深く関わってきたかについて調べてみよう。
- 5 昔、藍住町の特産品であった藍玉が、どのようにして藩外に出荷されていたかについて調べてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆杭でもつ：第十堰は今も構築時の杭をもって堰を基本的^{きほんてき}に固定している。堰の構造^{こうぞう}は松の杭^うを深く打ち込み、上部^うの構造^{こうぞう}を支えている。しかし杭だけでは巨大な水圧^{きょだい すいあつ}によって、杭の間に詰められた礫^{れき}が押し流^おされてしまうので、粘着^{ねんちやくりよく}力の強い菰^{こも}で作った大きい網^{あみ}を石^{かぶ}に被^{かぶ}せて蛇籠^{へびかご}を作り、それを杭の間に沈^{しず}めて杭の本来^{ほんらい}の力を保護^{ほご}する役割^{やくわり}を担^{にな}わせている。現在、第十堰の上部はたびたびの補修^{ほしゅう}でコンクリートも使用しているが、その基礎構造^{いっかん}は一貫^{いつかん}して杭と杭の間に詰められた蛇籠^{へびかご}である。そうした意味^いで、第十堰は今日でも杭で持ちこたえているのである。

むらさき ころも だいしん かつ
紫の 衣で大震 喝を入れ



見性寺境内にある大震和尚の墓



現在、勝瑞城跡に立つ見性寺

だいしん え たん こうげんじだいしつおしろう ていはつ しゅ
大震慧旦は10歳で徳島城下興源寺大室和尚の下で剃髮、修
ぎょう けんしやうじ しょこく へんれき たくしやう
行の後18歳で見性寺に入る。その後諸国を遍歴して卓州
いんざん ぎやうおう しょし
・隠山・行応ら諸師に参じ修行を積み、40歳となり見性寺
に落ち着くと、藩命で見性寺の方丈と庫裏を再建すると、五
はん ほうじやう くり さいけん ご
祖録会を講じるが諸国から200もの雲水が見性寺に集い盛況
そろくかい こう うんすい つど せいきやう
であったと記録されている。その後は興源寺住僧で大本山
じゅうそう
の京都妙心寺に再三住した玉潤元寔が病床にあったため、
みやうしんじ さいざん ぎよつかんげんぜ びやうしやう
大震は見性寺と興源寺を往復して多忙を極めた。嘉永3年(18
おうふく たぼう きわ かえい
50)に勅命によって妙心寺管長として大本山に住し紫衣を
ちよくめい かんちやう
賜っている。退任後の同7年には京都東山の高台寺(本山は
たまわ たいにん こうだいじ
けんじんじ しょうせい
建仁寺)から招請されて雲水の指導にあたったが、安政3年(1
あんせい
856)に帰藩すると、74歳のとき見性寺8世を嗣法の承応慧念
すほう じやうおうえねん
に託して隠居したが、明治3年8月17日に示寂、79歳であった。
たく いんきよ しじやく
見性寺は本来阿波三好家の菩提寺で、現在庫裏横の歴代住僧
ぼだいじ げんざい
墓地の中に、大震の墓は他を圧して建てられている。

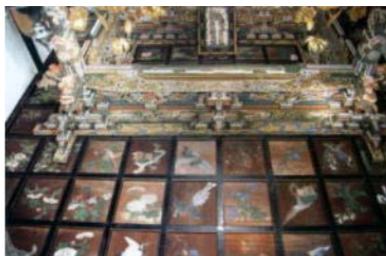
(学習のポイント)

- 1 見性寺はどんな理由で、またいつごろ現在地に移建されたのだろうか。
- 2 興源寺や妙心寺の歴史を調べ、大震がこの2寺との関係がどうなっていたかについて考えてみよう。
- 3 興源寺の玉潤禅師について調べ、大震との関係について考えてみよう。
- 4 妙心寺の管長となった阿波出身の禅僧について調べてみよう。
- 5 「紫衣」について調べ、その歴史上における意味について考えをまとめてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆大震慧旦(1792～1870)：興源寺の大室朝公の下で剃髪。8年間の修行の後に文化6年(1809)、見性寺に移る。その後に美濃・尾張・備前・伊予に出て修行を積み、36歳で興源寺に帰ると、玉潤禅師を補佐する。さらに見性寺に帰ると中興して活躍、安政6年(1859)に大本山妙心寺勅住となり、万延元年(1860)に見性寺に帰住した。
- ◆玉潤元寔(1771～1856)：京都に生まれ、16歳のとき興源寺に入って剃髪。20歳のとき雲水の旅に出て、備中・武州で修行に励んだ後に京都に帰り、竜安寺で修行した。30歳で興源寺に帰ると、隠山和尚の下で印可を受けると天下に文字禅を宣揚、文政期には諸国から雲水が玉潤の下に参じたという。その後、妙心寺に住んだ後興源寺に住したが、安政3年(1856)に83歳で遷化。
- ◆興源寺：徳島城下町に接する大岡村にあり、臨済宗妙心寺派の中本山で、蜂須賀家の菩提寺。寺領550石、境内に歴代藩主の廟所がある。
- ◆紫衣：諸宗の大本山では、その住職(現在の管長)決定は勅命によることとなっていた。その場合は法要など公式行事のとき着用するのが紫の衣で、宗門の最高位であることを象徴した。
- ◆高台寺：京都市東山区下河原通八坂にある臨済宗建仁寺派の古刹。慶長10年(1605)、北政所が豊臣秀吉の菩提を弔うために徳川家康の援助を得て創建。当時の堂宇として開山堂と霊屋(いづれも国重文)がある。

め 目もさめる かしやう えが 花鳥を描いた てんじようえ 天井絵



矢上には天井絵のある正法寺



正法寺至鎮夫人のゆかり寺

しょうぼうじ 正法寺は、近世初頭までしょうこうじ 正岡寺というぜんでら 禅寺であった。けいちよう 慶長
 5年(1600)のせきがはら 関ヶ原のあ わ はいりよう よし 合戦直後に改めて阿波国を拝領した至
 鎮は、大坂方に味方してはいたい あかまつりふさ きゆうりよう はんりよう 藩領に
 加えられたので、この地を幕府に願い出て敬台夫人の化粧料
 とした。ねつれつ ほっけ ねつれつ ほっけ ねつれつ ほっけ ねつれつ ほっけ ねつれつ ほっけ
 熱烈な法華信者で正岡寺をほっけしゆう かいしゆう 改宗すると、藩
 ではじりよう あた けいえい 正法寺に寺領を与え、寺の経営が成り立つようにしてい
 る。この寺の本堂内陣は見事でその荘厳の一切は藩のえし 絵師など
 に命じて仕上げたものが今もそのまま残されている。蜂須
 賀家はげん な 元和元年にわか 至鎮が若くしてちやくし ただてる 病死すると、嫡子の忠英が
 襲封するが、しゆうふう 忠英はかい ふ そうどう 海部騒動などでじたい の こ
 苦しい事態を乗り越えなくてはならなかった。そこでばっかく 敬台院は幕閣を説くなどして、
 忠英をきそ 力強く支えて活躍し、藩の基礎固めに大きくこうけん 貢献する
 が、そのことはほん 殆ど知られていない。なお、正法寺には敬
 台院がぞう 画像や忠英と敬台院のいはい 親子位牌もあって注目されている。

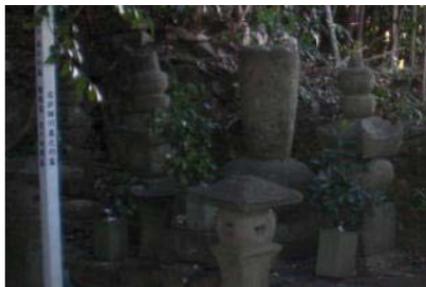
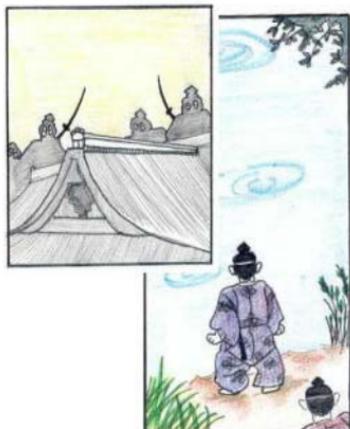
(学習のポイント)

- 1 正法寺の本堂内陣の天井絵（龍天井も含む）をよく見て、その由来や特色について調べてみよう。
- 2 赤松領について調べ、滅亡までの経過をまとめてみよう。
- 3 正法寺本堂に安置されている聖観音菩薩像の由来を調べてみよう。
- 4 2代藩主に危機をもたらした海部騒動について『徳島県史』第2巻などで調べてみよう。
- 5 敬台院の事歴について調べ、徳島藩の危機から救った理由について考えてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆ **赤松則房**(?～1598)：播磨守護赤松氏の嫡流。四国征伐には蜂須賀正勝・家政父子とともに阿波で活躍し、住吉に城を持ち1万石の領地を秀吉から与えられた。世嗣がなかったため、家政の口添えで細山帯刀を養子としたが、赤松家は置塩党と帯刀党に二分して内紛を生じ、則房は大坂に出て非業の死を遂げた。関ヶ原の合戦後は住吉藩が廃され、全て蜂須賀氏の所領となった。
- ◆ **内陣**：寺院本堂の法会などを営む寺の中心的な仏間を内陣といい、その奥に須弥壇を設けて本尊仏などを安置する最も神聖な空間。内陣の外側を外陣と称する。
- ◆ **海部騒動**：寛永10年(1633)、海部郡の知行地をめぐる益田長行の不正が蜂須賀家の役人によって摘発され、長行はそのことにより、改易処分となり名西山分に押し込まれていた。長行はそれを恨み、義弟を利用して蜂須賀家の不正を公儀に訴えた。そのため、長行と仕置家老長谷川貞恒が老中列座の席で対決。その結果、蜂須賀家不正の訴えは老中の裁定で退けられ、長行父子は忠英に預けられることとなり、事件が起きた10年余り後の正保期になってやっと事件は解決した。

もちたか うんめい りゅうおんじ
持隆の 運命くるわす 竜音寺



丈六寺にある持隆の墓

持隆は川遊びに誘い出され義賢の手勢に襲われた。

あ わ し ゆ ご あ し か が よ し ひ で じ よ う ら く
阿波守護細川持隆は、足利義栄を立てて上洛しようと計画
したが三好義賢よしかたに反対され、その志を果たすことができな
かった。そのため持隆は義賢殺害を企くわだてるが、その計画は
し の み や よ き ち べ え て ん ぶ ん
四宮与吉兵衛によって義賢に伝えられた。天文22年(1553)6
月、義賢は先手を打って兵二千余騎を潜ひそませ、与吉兵衛を使
いにして持隆を川遊びに誘い出した。持隆は、反逆とは夢
にも思わず、居い合わせた百名ほどを召めし連かわぞれて川沿いの竜音
寺ゆさんに遊山に出かけた。そこで義賢は潜ませている兵に持隆を
襲おそわせ、見性寺にて切腹けんしやうじに追せつぷくい込んだ。これが世にいう
「勝瑞騒動しょうずいそうどう」である。この事件じけんにより細川氏の守護しはい支配は
じっしつてき ほんぎやく ゆめ
実質的に終わりを告げ、阿波の実権は三好氏に移行すること
となる。義賢は阿波守護に持隆の子真之まねゆきを推戴すいたいするが名目的
なものであった。また、与吉兵衛うらぎについては一時自らの知行
の一部を与えたが、持隆を裏切った行為を不忠こうい ぶちゆうとして一年後
に成敗されたそうである。

(学習のポイント)

- 1 細川持隆が足利義栄を立てて上洛しようとした背景を調べてみよう。
- 2 竜音寺や見性寺はどの位置にあったのだろうか。伝承などを古者から聞いてみよう。
- 3 「勝瑞騒動」は下克上の典型的な事件であるが、この時代、各地でおこった下克上の事件を調べてみよう。
- 4 義賢は何故、持隆殺害後にその子を守護に推戴したのだろうか。
- 5 主君を殺害した義賢の行為や、裏切った与吉兵衛の行為、与吉兵衛を殺害した義賢の行為についてどのように感じたか話し合ってみよう。

〔用語の解説〕

- ◆細川持隆(1497~1553)：永正9年(1512)、父之持の死去により家督を継ぎ、阿波守護となった。管領の細川晴元をよく補佐し、享禄4年(1531)には軍を率いて和泉に渡海し、高国の討伐戦(大物崩れ)で功績を挙げた。
- ◆足利義栄(1538~1568)：室町幕府の第14代将軍。阿波国平島荘で生まれ、細川氏や三好氏の支援を受けた。永禄11年(1568)、三好三人衆の出挙により将軍に就任したが、入京することなく同年9月に病死した。
- ◆竜音寺：戦国期に勝瑞にあった寺。享保7年(1722)、見性寺再建にあたり竜音を山号、見性を寺号とした。
- ◆細川真之(1538~1584)：天文22年(1553)、勝瑞騒動により持隆没後、三好義賢により阿波守護に推戴された。三好氏には大いに不満を持ち、天正6年(1578)には反三好勢力と結び長治を討った。

やりば 鐘場には く め よ し ひ ろ の 義 戦 跡



鐘場の古戦場に立つ石碑

てんぶん 天文22年(1553)、阿波守護 阿波 守 護 郷 川持隆が家臣の三好義賢に自害に追い込まれるという、事件がおこった。この事件に対して義賢に兵を挙げたのが持隆の忠義な家臣であった芝原城主(徳島市国府町)、久米安芸守義弘である。義賢は義弘の娘婿であったが、義賢を討ち取って主君持隆の心を慰めようと考えたのである。世にいう「鐘場の義戦」である。花房城(徳島市上八万町)の仁木日向守高将や蔵本城(徳島市蔵本町)の小倉美濃守重信、野田山城(徳島市上八万町)の野田内蔵助、佐野須賀城(徳島市国府町)の佐野丹後守平明らとともに兵を挙げたが、戦いは多勢に無勢でことごとく討ち死にした。しかし、下剋上が世の常であったこの時代に行われたこの義戦は、『阿州古戦記』では「細川頼春より国に道ある跡の名残、この一挙にとどまりける」と賛嘆している。鐘場の古戦場は、徳島市国府町東黒田と藍住町東中富字大塚傍示の両方で言い伝えられている。

(学習のポイント)

- 1 「鑓場の義戦」をおこした久米安芸守義弘の居城跡である芝原城跡周辺に残る久米安芸守義弘に関する伝承を古者にたずねてみよう。
- 2 「鑓場の義戦」が与えた影響はどのようなものがあったのだろうか。
- 3 義戦といわれる戦いについて調べてみよう。
- 4 鑓場の古戦場を訪れてみよう。
- 5 「鑓場の義戦」跡地は、2箇所^の伝承地があるが何故だろうか。

〔用語の解説〕

- ◆芝原城：徳島市国府町芝原^{はちまん}の八幡神社と蔵珠院^{ぞうしゆいん}一帯に比定^{ひてい}される平城^{ひらじろ}。天文年間^{ちくじよう}に築城され、城主は久米義弘。
- ◆久米義弘：先祖は伊予久米荘^{いよくめのしやう}の出身といわれる。
- ◆花房城：徳島市上八万町花房^{きよじやう}の西本願寺山にあった平山城で、仁木日向守高将の居城であった。
- ◆下剋上：下、上に克^かつ^{の意味で}、下位の者が上位の者を政治的^{せいじてき}、軍事的に打倒^{だとう}して地位や権力^{けんりよく}を侵^{おか}すこと。「下剋上する成出者」と二条河原^{にじやうがわら}の落書^{うた}に詠われ、戦国時代の社会的風潮^{ふうちやう}を象徴^{しやうちやう}する言葉ともされる。豊臣秀吉も典型的な下剋上により天下を取る^{とよみひでよし}に至^{いた}った。
- ◆阿州古戦記：宝暦5年(1755)に円志軒治延^{へんさん}によって編纂された軍記物。『阿波国徴古雑抄』所収^{あわのくにちやうこざつしやう}。

ゆめ 夢追って けいき せい 京畿を制した あわ ぶし 阿波の武士



三好長輝像（見性寺蔵）



三好長基像（見性寺蔵）

けんむ けいせい せい 建武3年(1336)、細川和氏・頼春兄
たかうじ 弟は足利尊氏の命によって阿波に入った。室町時代に入ると、細川氏は阿波
むろまち 守護に任命されたが、和氏から数えて
しゅご にんめい 3代目に当たる頼之は、将軍義満の後
よりゆき 見役として招聘され、幕府の管領に
しやうべい 就任した。以後嫡流(京兆家)は代々
しゆうにん 管領に任ぜられ、斯波氏・畠山氏と
にん しば はたけやま ともに三管領の一つに数えられる。
おうにん らん おうにん ちん らん 応仁の乱で細川勝元は東軍の総帥となり、その子政元は明応の政変で10代将軍足利義材を退けて幕府の実権を掌握した。また、細川氏の家臣三好氏も畿内で活躍した。三好之長は特に軍事面で細川氏を支え、着実に力を蓄えていく。之長没後は孫の元長が跡を継ぐが、元長は堺幕府の中心的存在として幕政を大きく左右するまでになる。さらに子の長慶は天文22年(1552)、将軍義輝を近江朽木に追いやり、自らが最高権力者として約5年半にわたり畿内を直接支配した。このように、室町時代は阿波の武将が京畿を支配した時代でもあった。

(学習のポイント)

- 1 応仁の乱と阿波武士との関係を調べてみよう。
- 2 室町幕府の中で、細川氏はどのような役割を担っていたか調べてみよう。
- 3 阿波公方について調べて話し合おう。
- 4 三好之長や元長が畿内で活躍するようになった背景を調べてみよう。
- 5 堺幕府と三好元長、長慶の関係を整理し、発表してみよう。

[用語の解説]

- ◆細川和氏(1296~1342)：室町時代の初代阿波守護とされる。
夢窓疎石を招き補陀寺を開くなど、秋月守護所の整備に努めた。
- ◆細川頼春(1304~1352)：兄、和氏と共に阿波に入り、和氏を補佐した。1338年には阿波国と備後国の守護となり、鎌倉時代の阿波守護小笠原氏を傘下に治めた。
- ◆京兆家：細川家の嫡流。京兆とは右京大夫の唐名であり、当主が代々右京大夫に任ぜられたことに由来する。
- ◆足利義材(1466~1523)：室町幕府第10代将軍。細川政元と対立して将軍職を廃され幽閉されたが、脱出して京都回復・将軍復職をめざして各地で亡命生活を送る。一時将軍職に復帰するが細川高国に追われ再び将軍職を失う。最後は阿波で死去した。
- ◆三好之長(1458~1520)：細川氏の家臣として仕え、応仁の乱で初陣を飾る。強力な軍事力で細川氏を支え、後に三好氏が畿内で活躍する地盤を築いた。
- ◆足利義輝(1536~1565)：室町幕府第13代将軍。幕府権力を取り戻そうと奔走したが、松永久秀と三好三人衆によって殺害された。

よししげ め が りゆう うめ ぼう
至鎮が 愛でた臥竜の 梅の坊



徳命の臥竜の梅は千光寺



千光寺観音堂も梅の中

はちすかよししげ とくしまはん しょうぐん けい せい
蜂須賀至鎮は徳島藩初代藩主、その正室は将軍家から政
りやくけっこん か きょうだい じん かつやく
略結婚で嫁した敬台夫人。大坂冬の陣の活躍はめざましく、
その戦功で淡路国(7万余石)を江戸幕府から加増され、25万
あわじ えどぼくふ かぞう
余石の大大名となった。また文芸や風情を愛する文化人でも
あり、毎年の春先には徳命の梅の坊(千光寺)に咲き誇った臥
りゆうばい はいく
竜梅を好み、観梅を心から楽しみつつ、和歌や俳句も残し
ている。臥竜梅は1本の大木から大きく周囲に枝を張り、梅
の坊には境内いっぱい花を咲かせ、その芳香は付近一帯に
えだ は
漂っていたと伝えられている。至鎮主従の一団は、徳島城
ただよ しゅじゆう いちだん
の内濠となっていた助任川から舟を出し、吉野川を遡って
うちぼり すけとうがわ ふね だ よしの がわ さかのぼ
名田の湊に上陸すると梅の坊は近く、手頃な観梅を楽しむ
てごろ
ことができた。戦いと、領内の支配を強化するため多忙な日
りょうない しはい たぼう
々に明け暮れていた至鎮の心を、この臥竜梅がどれほど癒し
あ く いや
たことか。この寺院の現在の梅は、至鎮の時代から3代目の
げんざい
ものであると伝えられている。

(学習のポイント)

- 1 徳命の千光寺とその周辺を歩いて400年ほど以前の当地の様子について調べてみよう。
- 2 蜂須賀至鎮の行状を調べよう。
- 3 大坂冬の陣における蜂須賀家主従の大活躍を伝える資料を探してみよう。
- 4 臥竜梅はどのような梅であったか、植物図鑑などを利用してまとめてみよう。
- 5 敬台夫人は梅の坊で至鎮を毒殺したという誤った伝承がある。なぜ、そのような誤説が信じられてきたかについて考えてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆蜂須賀至鎮(1586～1620)：関ヶ原の合戦には徳川家康の旗下で戦い、父家政が豊臣家に返上した阿波を改めて拝領。徳島藩初代藩主。慶長19年(1614)の大坂冬の陣での先行は顕著で、家康・秀忠から七感状を得た。大坂夏の陣後の元和元年(1615)に淡路国7万石が加増され、25万石余りの大大名となり松平姓を許されている。
- ◆加増：幕藩体制下の家臣たちは、將軍・大名から拝領する知行に対し軍役を負担してその御恩に報いた。領主は家臣の格別の功績に対して知行を増やして報いている。こうした増加分の知行をあてがうことを加増という。
- ◆臥竜梅：1本の梅から枝が四方に伸び、龍が臥したような見事な枝振りえだぶりで咲き誇っていたのが千光寺の梅であったという。しかし、大正期には枯れてしまったようで、現在は普通の梅が植えられている。
- ◆梅の坊：近世初頭までは、千光寺を梅の坊よと呼んでいたといわれている。

らくじょう
落城の

あいかん
哀感伝える

ぎちよう ひ
義冢の碑



三好氏の離散を惜しむ義冢の碑



落城の濠に義冢の影写し

げんざい しょうずいぎ
現在、勝瑞城跡に立つ勝瑞義
ちようひ 冢碑は、もとは100mほど北の持
みょういん ぼ ち けんしやうじ けいだい うつ
明院跡の墓地にあったものを昭和初期に見性寺の境内に移
してきたといわれる。正面に「勝瑞義冢碑」と彫られ、他の
せいすい くわ
三面には阿波三好氏の盛衰が漢文で詳しく書かれている。こ
とくしまはん じゅがくしや しこくせいがく しょう なぼろどう
の一文は、徳島藩の儒学者で四国正学と称された那波魯堂
しょうや いわさやすけ いらい
が、勝瑞村の庄屋であった岩佐谷助の依頼によって書いたも
しゅじゆう りさん お
ので、三好家主従の敗戦と離散した歴史を惜しみ、また戦死
とむら てんめい ぞうりゆう
者を弔うために天明三年(1783)に造立された。碑には、ま
ていぼう
ずこの地方の水害による堤防工事にあたって多くの遺骨が
はっくつ
発掘されたことが記されている。次に勝瑞城に拠る細川・三
こうそう こうぼう けいせい
好両氏の抗争と興亡や天下の形勢について、また長宗我部氏
しんこう かいめつ げんいん
の侵攻と勝瑞の壊滅について記し、遺骨の出る原因について
の
述べている。そして、最後に無縁仏の供養のために墓を築造
むえんぼとけ くよう はか ちくぞう
したることと、そのことによる靈験に期待することが記されて
れいげん
いる。その碑文は名文であると親しまれてきたのである。
ひぶん

(学習のポイント)

- 1 勝瑞義冢碑にはどのようなことが書かれているのだろうか。実際に読んでみよう。
- 2 勝瑞義冢碑は何故建てられたのだろうか。
- 3 勝瑞義冢碑が建てられた頃には、細川氏・三好氏の歴史はどのように伝わり、どのように考えられていたのだろうか。
- 4 那波魯堂について調べてみよう。
- 5 那波魯堂の著作にはどのようなものがあるだろうか。その書を読んでみよう。

〔用語の解説〕

◆持明院跡：勝瑞城跡から濠を隔てた北側に墓地があるが、ここが持明院跡である。蜂須賀家政の阿波入部直後に勝瑞の地にあった大半の寺院は徳島城下に移された。そのとき持明院は名西郡入田村(現、徳島市)の建治寺と併合して寺町の現在の還国寺の位置に移るが、その後寛永期に再度移転する。明治維新の廃仏毀釈で廃寺となったが、薬師堂が残った。それが今日の常慶院である。また、方丈の庭も残っており、現在は天理教徳島教区の庭となっている。

◆那波魯堂(1727～1789)：江戸時代中期の儒学者で播磨国姫路の出身。徳島藩11代藩主蜂須賀治昭に招かれて藩儒として活躍し、「四国正学」と称された。著書『学問源流』は朱子学擁護という当時の時代の要請とその分かりやすい文章から、江戸時代を通じて何回か刊行され、明治以後も活字本として刊行されている。

りょうじ 龍池には あんぜんねが 安全願う たかじぞう 高地蔵



川舟の安全願う高地蔵



舟運が阿波の暮らしを栄えさす

東中富字龍池の県道に沿った旧道に大きい高地蔵が往来する人々の安全を見守っているかの姿で立てられている。この地蔵尊は安政元年(1854)11月5日の安政南海道地震の死者を供養するために建てられたものである。そのころ、旧吉野川に臨む藍玉の積み出しや、金肥の陸揚げで賑わっていたカクジの浜という川湊がこの付近にあった。その湊は地震の時の液状化現象で潰され、在来の機能を失ってしまったそうである。そのとき農家の多くと畑も大きい被害を受けて、周辺部の景観は一変してしまった。その後、龍池付近の人々は、藍玉は名田まで陸路で運び、船に積み込むようになったそうである。この地は安政南海地震だけでなく、毎年のような洪水でも多くの被害を被ったので、この付近一帯には大小の地蔵尊が建てられ、犠牲者の霊を弔う風習が定着した。こうして今も多くの地蔵尊が在所の人たちによって祀られている。

(学習のポイント)

- 1 安政の南海大震災について調べてみよう。
- 2 カクジの浜の位置について、付近の人たちに尋ねてみよう。
- 3 地震や洪水などで犠牲者が出ると、その霊を弔うために地蔵尊を建てた理由を調べてみよう。
- 4 町内の地蔵尊を調べ、その特色についてまとめてみよう。
- 5 龍池付近にある地蔵尊の写真を集め、それぞれ建てられた理由や背景を考えてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆**高地蔵**：地震や洪水などの大災害が発生すると、地元の人々は災害からの復興に努めるとともに、犠牲者を供養し再び災害が発生しないようにと人目につきやすい往還道沿いや辻などに見上げるような高地蔵を造立している。これらの地蔵尊の多くは、今も香火が供えられ、在所の人々の信仰の対象となっているものが多い。
- ◆**安政南海地震**：安政3年（1854）11月4日、遠州灘を中心とするマグニチュード8.4の東海大地震が発生、翌5日には同規模の南海大地震が紀伊水道を震源に発生、さらに7日には伊予灘でマグニチュード7.4の地震が発生した。この3つの地震が相次いだため、合計2,600人の死者が出たうえ、全壊と流失家屋、焼失家屋は8万件余となったとされている。
- ◆**カクジの浜**：旧吉野川に設けられていた川湊の一つで、東中富村などの藍玉を積み出し、大量の金肥などの積み入れ港となっていた。

るいるいと どるい 土塁めぐらす しようずいじよ 勝瑞城



勝瑞の城跡巡る残土塁



主無き勝瑞城址にサツキ咲く

てんしよう 天正3年(1575)、と さとういつ 土佐統一を果たした長宗我部氏は讃岐・
いよ あわ しんこう 伊予・阿波への侵攻を開始した。阿波の三好方は、同年に
かいふじよう おと おおにしじよ 海部城(海陽町)を陥され、天正5年(1577)には大西城(三好市)
せんきよ きんちよ を占拠されるなど、軍事的な緊張が一気に高まった。当時の
そごうまさやす やすなが 勝瑞の主であった十河存保は天正9年(1581)、同族の三好康長
おだのぶなが きゆうえん いらい はしほひでよし を通じて織田信長に救援を依頼したが、このとき、羽柴秀吉
からは長宗我部氏の阿波侵攻に対して勝瑞の守りを固める
ひつようせい はつくつちようさ 必要性が書き送られてている。発掘調査により、勝瑞城は16
きず はば ほり 世紀末に築かれた城で、上幅13m・深さ2m以上の濠ととも
きていぶ めぐ けんご に基底部幅12.5m・高さ2.5mの土塁が巡らされていた堅固
ぼうぎよしせつ かくにん な防衛施設であったことが確認された。このことから、長宗
さい 我部氏の勝瑞侵攻に際して築かれたものではないかと考えら
ぼだいじ けんしようじ れている。勝瑞城跡は今は三好氏の菩提寺である見性寺の
けいだい めぐ 境内となっているが、濠が巡り、土塁も一部残っており、当
おもかげ し 時の面影を偲ばせている。

(学習のポイント)

- 1 勝瑞城跡は、今どようになっているのか実際にみてみよう。
- 2 勝瑞城跡の発掘調査で出土した遺物や遺構について調べてみよう。
- 3 勝瑞城跡からは大量の瓦が出土しているが、その意味を考えてみよう。
- 4 勝瑞城跡の濠は、人間の力で掘るとどのくらいかかるだろうか。
- 5 戦国時代の城郭の特色を調べてみよう。

[用語の解説]

- ◆長宗我部元親(1539～1599)：土佐の国人から戦国大名に成長した武将で、伊予河野氏や阿波三好氏と戦い、四国を制覇した。一領具足といわれる兵農分離前の武装農民や地侍を対象に編成、運用した半農半兵の兵士を動員して勢力を拡大した。天正13年(1585)には四国をほぼ統一したが、同年、豊臣秀吉の四国征伐に降伏し、土佐一国のみを安堵される。
- ◆見性寺：岩倉(美馬市脇町)にあった宝珠寺を永正年間に三好元長が父之長の菩提のため勝瑞に移して見性寺と改めたとされる。天正年間の戦乱により荒廃したが延宝年間に中興、当時は現地より西方にあったが享保7年(1722)に勝瑞城跡に移転された。臨濟宗妙心寺派で本尊は釈迦如来。
- ◆勝瑞城の濠：勝瑞城跡の濠は、発掘調査によるとさらに複雑に広範囲に広がる。勝瑞城跡の南側の県道沿いや勝瑞館跡では縦横に延びる大規模な濠跡が見つかっている。藍住町域は、度々吉野川の氾濫による洪水に見舞われているが、勝瑞城の濠は防御施設としてだけでなく、城下の治水の役割も果たしていたであろう。

れきしじょう しんかせいしき よくし
 歴史上 新加制式 よく知られ



篠原長房が本拠とした上桜城跡

「新加制式」とは、三好氏がその分国統治の必要上家臣・領民を統制するために制定した二十二条からなる分国法で、家臣の篠原長房によって編纂・制定された。篠原長房は、三好氏の家中にあって重きをなした武将であり、三好義賢が河内高屋城に移った後は阿讃支配は事実上長房に委ねられていた。『三好別記』には、「実休(義賢)の旧臣篠原駒雲(長房)才智あるゆえに、薬師という智者を崇敬して諸事を相談し、式目を以て訴訟を分、万事にわたくしなかりければ、諸人うらみを存ぜざる。阿波・讃岐・淡路三カ国よくおさまり候」と記されている。ここに記された「式目」が「新加制式」で、三好氏の被官はもとより、僧侶・神官から百姓にいたる人々を対象として、主に犯罪と刑罰関係、物権、債権、相続関係の規定を盛り込んだもので、よくまとまったすばらしい法令であったようである。

(学習のポイント)

- 1 戦国大名が制定した著名な分国法(家法)を調べてみよう。
- 2 「新加制式」はどのようなことが規定されているか。
- 3 「新加制式」は篠原長房が起草したとされるが、長房はどのような武将であったか調べてみよう。
- 4 他の大名の家法と比較して「新加制式」にはどのような特色が見られるであろうか。
- 5 上桜城(吉野川市川島町)は長房の居城であったと伝えられるが、一度見学してみよう。

〔用語の解説〕

- ◆分国法：戦国大名が領国を支配するために制定した分国法。分国支配が進んだ室町時代の中期以降に領内の武士や領民を規制するために定められるようになった。「大内家壁書」や「今川俊元名目録」、「甲州法度次第」、「長宗我部元親百箇条」などがある。
- ◆篠原長房(?～1573)：阿波三好氏の家臣。義賢没後は跡を継いだ長治を補佐し、長慶没後は三好三人衆に加勢し、足利義栄を擁立しての畿内進出に協力したり、フロイスの入京を斡旋したりした。しかし天正元年(1573)、讒言により長治に攻められ居城の上桜城において討ち死にした。
- ◆高屋城：大阪府羽曳野市に所在する。竹内街道、東高野街道が交差し、石川の水運を利用した港があった交通の要衝に立地している。戦国期には、畠山高政・安見直政・三好長慶の三勢力により、高屋城争奪戦が繰り返され、目まぐるしく城主が入れ替わった。永禄3年(1560)、河内に出陣した長慶は高屋城・飯盛城を攻め落とすと河内を直轄領化した。こうして、長慶は芥川城から飯盛城に移り、義賢を高屋城に入れて河内の支配を委ねた。しかし、永禄5年(1562)に義賢は和泉久米田の戦いで戦死すると、再び畠山氏の居城となった。天正3年、最後の城主となった三好康長が、織田信長に攻められ落城。その後、高屋城は廃城となった。

ろん そう しる ほつ け そう
論争で 城ゆるがせた 法華僧



本行寺境内に立つ三好長治の墓



戦前の本行寺山門
〔写真は徳島県立文書館蔵〕

勝瑞城主三好長治は、熱心な日蓮宗の信者であった。天正3年(1575)、「阿波一国の衆、生まれ子まで日蓮宗になし、法華経をいただかせ、他宗の寺へ出入ることゆるされず。」(『三好別記』)と阿波国の領民を日蓮宗に改宗させるという大胆な政策を打ち出した。『三好別記』によると、日蓮宗の進出により、阿波の各宗寺院、特に真言宗寺院は旦那をとられ、寺院存続の危機に陥ってしまったという。そして、真言宗の山伏3,000人が持明院に集まり訴訟をおこしたため、宗教論争がおこなわれることになった。この論争に備え、日蓮宗側は日蓮宗の本山である大阪府堺市の妙国寺から日珣を、真言宗側は高野山から円正を招いた。この宗教論争に関する唯一の同時代史料である日珣の「己行記」によると、日蓮宗側の勝利に終わったとされる。しかし、天正5年(1577)に長治は細川真之のために自害におこまれ、この宗教政策自体はその後どうなったかは不明である。

(学習のポイント)

- 1 宗論とは何かについて調べてみよう。
- 2 三好氏が拠点とした堺では日蓮宗が盛んであった事情を調べてみよう。
- 3 勝瑞の宗論で日蓮宗に挑戦した真言宗側の動きについて詳しく調べてみよう。
- 4 「己行記」には宗論についてどのように書かれているのか、調べてみよう。
- 5 日珧を堺に送り返した篠原自遁とはどのような武将であったのか、調べてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆三好長治(1553~1577)：義賢よしかたの長男。永禄5年に義賢が和泉久米田いずみくめの戦いで戦死し、家督かとくを継いだ。長治は、勝瑞きよてんを拠点きないに畿内の三好三人衆を助けて信長たいこうに対抗するなど、優れた武将として知られる。しかし、元亀元年(1572)に讒言ざんげんにより重臣しのはらながふさの篠原長房を攻め滅ぼすなど、自らの政治力を低下させた。天正5年(1577)、長原(松茂町)の地で自害した。
- ◆改宗：従来信仰しんこうしていた宗旨しゅうしを捨てて、他の宗旨すに改めること。
- ◆日珧(1532~1598)：日蓮宗を代表する安土桃山時代あづちももやまの僧。三好氏じりょうに寺領きしんの寄進を受け、父である堺さかいの豪商油屋の伊達常言だてじょうごんの支援しで堺に妙国寺を開いた。織田信長が仕掛けた浄土宗との宗論しんかである「安土宗論」では浄土宗に敗れている。
- ◆己行記：永禄4年(1561)から天正13年(1585)の25年間にわたる日珧直筆しゅうきの日記。永禄11年(1568)、実休の7周忌どきょうに読経したことや、勝瑞宗論についても記されており、日珧と三好氏との深い関わりかかわりも見える。堺市指定文化財。

わが町の 歩を刻む 板碑群



阿弥陀橋の板碑



矢上字春日にある板碑

板碑とは、^{ごりんとう}五輪塔を簡略化した^{かんりやくか}供養塔のことで、石製の^{そとぼ}卒塔婆である。^{かまくら}鎌倉時代から^{むろまち}室町時代前期に多く建てられ、^{てんしやう}天正期には^{すがた}姿を消す。板碑の分布は主に^{ぶんぶ}関東に見られるが、^{あわ}徳島県も板碑文化圏の一つであった。阿波の板碑は、山形に整形された^{とくちやう}頭部とその下に刻まれた2条の^{とくちやう}横線が特徴である。さらに、^{ぶつぞう}塔身部には、^{ひやうしき}仏像や^{ぞうりゆうしや}種子などの^{わくせん}標識、^{しゆし}造立者名、^{めい}造立趣旨、^{いづばんてき}紀年銘などが刻まれており、これらを^{なんぼくちやう}囲む^{すいてい}枠線が見られるものが一般的である。こうした^{あわがたいたび}要素を備えた板碑を「阿波型板碑」といい、^き県内に1500基～2000基^{ざんそん}残存するといわれている。^{げんざい}藍住町内には現在7基^{かくにん}確認されており、最も古いもので^{とくしまじやうかまち}南北朝期と^{うつ}推定される。藍住町内で^{げんこくじ}確認された板碑の数は、^{そんざい}中世阿波の中心地にしてはあまりにも少ない。徳島城下町が^{けんせつ}建設される際、^{さい}勝瑞の寺院が^{いてん}移転された。そのときに^{うつ}移された^{げんこくじ}とされる板碑が現在も^{そんざい}徳島市寺町の還国寺に存在する。こうした例がもしかすると他にもあるのかもしれない。

(学習のポイント)

- 1 板碑とは何のために造られた石碑だろうか。
- 2 阿波型板碑の特色について、関東や九州板碑と比較しながら考えてみよう。
- 3 南北朝内乱期の研究にとって、阿波型板碑は重要な遺物とされるのは何故だろうか。
- 4 藍住町内に残る板碑を実際に見てみよう。
- 5 徳島県内の板碑の分布を調べてみよう。

〔用語の解説〕

- ◆**還国寺**：勝瑞ほうねんに法然ちようがんの弟子聴願じようおうが開基したとされる。三好氏からは14貫文と1町7反の寺領を得ていた。承応元年(1652)に徳島藩3代藩主蜂須賀光隆はちすかみつたかは、関東から笑誉しやうよを招いて現地に再建した。そして、徳川將軍家の位牌かしを下賜されたため、將軍家の廟所びやうじよを境内に営んだ。そのため、3石の寺領を与えられ、2200坪の境内をもつ格式の高い寺であった。
- ◆**町内の板碑**：町内でよく知られているのは勝瑞せんげんぼりの千間堀に架かる阿弥陀橋あみだ たもとの袂にある板碑で、阿弥陀如来をあらわす梵字「キリーク」とその下に南無阿弥陀仏なむあみだぶつの文字きざが刻まれている。また、最近の阿波学会の調査で住吉の福成寺境内にある地藏堂内部ふくじようじけいだいから2基の板碑が発見されたことも注目されている。
- ◆**阿波型板碑の特色**：阿波型板碑は関東などの大型のものくらと比べて小型で、その多くは阿弥陀板碑となっている。秋の彼岸ひがんなどのときに永久保存用の卒塔婆として建てられたものと考えられ、その材質ざいしつは阿波特産の緑泥片岩りよくでいへんがん(青石)を用いるのが普通ふつうで、砂岩まれなどのものは稀である。

藍住歴史かるたの運び方

1 競技の心がけ

このかるたは、楽しく競技をしながら、藍住町の歴史を学び、郷土愛を深めるようにと願ってつくったものです。礼儀正しく、きまりを守って楽しくあそびましょう。

2 競技の方法

このかるたは、絵札を取り札としますが、家庭や親しいお友達と競技する場合、反対に字札を取り札とするなど、いろいろ工夫してください。また、読み手が1人に取り手が3人でも5人でもよいのです。競技の場合は字札を読み、絵札を取り札とし、次のとおりとします。

- (1) 団体競技(3人が1組となり、2組で勝負します。)
- (2) 個人競技(1人対1人で勝負します。)

3 競技の係

- (1) 進行係(1名)…かるた会全体をすすめていきますが、人数が少ないときは、読み手がかわることもできます。
- (2) 読み手(1名)…読み札を読みます。
- (3) 審判係(各試合に1名)…競技を公平に見守ります。

4 競技の準備

- (1) 団体競技の場合は、3人が一列になり、敵味方が向かい合ってならびます。この陣の巾は約2m、この巾の中に適当な間隔をおいて座ります。個人競技の場合も陣の巾は同じです。
- (2) 進行係の合図で、真ん中に座っている者が代表となっ

て、ジャンケンをし、勝った者がかかるたの札をよくきつて、22枚ずつに分けて前におき、ジャンケンに負けた者が先にどちらかを取ります。

(3) 札のならば方…自分たちの前に2列に並べます。敵と味方の間は3cmはなし、選手のひざがしらと札との間は15cm以上あけます。

(4) 札の並べはじめから、5分間を記憶する時間にあてます。

5 競技の開始

(1) 記憶時間が終わると、進行係の合図でおたがいに札を交します。

(2) まず、読み手が空札を2回読みます。空札は、やく札のなかの㊦とします。空札を2回読むのは予令となり、3回目に読む札から取るのですが、その後は、いま取った札を予令として、もう一度くり返して読み、最後まで続けます。

(3) 競技中は勝手に札の位置を変えてはいけません。札のあいたところできて、札の位置を変える時は、相手の了解を得てから変えます。取り札が最後の2枚になったら、どちらの札が残っても横に30cmはなしてならば、各組のまん中の1名が代表してこの札を争い、1枚取った者が残りの1枚も取ります。この場合、予令として空札を2回読みます。

6 採点

(1) 得点は1枚1点とし、やく札のうち、空札として使われた㊦（「蟬の声 聞きつつ土用の 藍こなし」）だけを3点

として採点します。

- (2) 同点の場合は、やく札を取った方を勝ちとします。
- (3) 競技が終わったら、取った札を自分たちの前にならべ、まん中の者が審判係に報告します。
- (4) 報告をうけた審判係は、両方の取った札をしらべ、勝敗を決めます。

7 競技上の注意

- (1) 札を取る時は片手でおさえるか、はじくかします。決して両手を使ったり、札の上にかぶさってはいけません。使わない手は、ひざから前に出さないで、札が読まれるまでは、両手をひざの上におくか、ひざの前につけておきます。
- (2) お手つき…自分の陣でも、敵の陣でも読まれた札のない方をついたら、「お手つき」として、取った札の中から1枚を敵にわたします。団体競技で2人ないし3人が同時に同じ札に「お手つき」しても敵にわたす札は1枚です。
- (3) あいこ…同じ札に両方の手が重なったら「あいこ」といって、下の者が取ります。同時で判定できない場合は、持ち札の者にゆずりますが、それは審判係が決めます。
- (4) 相手に不満があっても直接言い争ったりしないで、審判係を通じて堂々と意見をのべましょう。
- (5) 競技のはじめと終わりには、お互いに札を交わしましょう。

かるた絵札担当者（敬称略・50音順）

青木茂信・犬伏美智子・越久高照・賀治俊也・富岡晴恵
原田明實・原田史郎・平野治平・細川真理子・宮本武文
三好初子

解説書作成等における協力者、協力機関（敬称略・50音順）

胡田俊一・木村憲通・渋谷雅子・鈴木和子・中山和子
永田啓子・新居房子・原田弘也・正木寿枝・正木博之
三好昭一郎・村田忠照

愛染院・見性寺・堺市文化財課・堺市立堺市博物館
正法寺・徳島県立文書館・徳島市教育委員会
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
米沢市上杉博物館・妙国寺

藍住歴史かるた解説書

平成23年2月25日

編集・発行 藍住町教育委員会
徳島県板野郡藍住町奥野字矢上前52-1